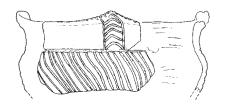
四万十市埋蔵文化財発掘調查報告

平成2年度~平成16年度 市内遺跡試掘確認調查報告書



2008.3

四万十市教育委員会



出土した縄文時代の土器



出土した古代の煮炊具

四万十市埋蔵文化財発掘調査報告

平成2年度~平成16年度市内遺跡試掘確認調查報告書

2008.3

四万十市教育委員会

- 1. 本書は平成2年度から平成16年度に、高知県四万十市内において実施した試掘確認調査を報告するものである。
- 2. 現地調査の呼称、調査期間、担当者は以下の表のとおりである。

遺跡名	調査記号	年度	調査期間	調査担当者	対象面積(m)	調査面積(㎡)
国見南沖屋敷	_	2	平成2年12月11日~平成2年12月25日	松田直則	12,400	252
具同中山遺跡群	97-5GN	9	平成9年11月4日~平成9年11月14日	松田知彦	1,080	60
大屋敷遺跡	_	9	平成 10 年 2 月 12 日~平成 10 年 2 月 26 日	松田知彦	20,000	75
具同中山遺跡群	_	12	平成 13 年 1 月 23 日~平成 13 年 2 月 9 日	山本哲也	3,500	256
スゲンダの駄場遺跡	2002001	13	平成 13 年 5 月 8 日~平成 13 年 5 月 11 日	川村慎也	2,727	32
具同中山遺跡群	2002013	14	平成 15 年 2 月 17 日~平成 15 年 3 月 4 日	川村慎也	16,551	156
具同中山遺跡群	2002014	14	平成 15 年 3 月 4 日~平成 15 年 3 月 20 日	川村慎也	5,178	80
九樹城跡	2002015	15	平成 15 年 6 月 10 日~平成 15 年 7 月 4 日	川村慎也	1,575	15
三里遺跡	2002018	15	平成 15 年 11 月 12 日~平成 15 年 12 月 15 日	川村慎也	960,000	480
具同中山遺跡群	2003018	16	平成 16 年 8 月 31 日~平成 16 年 9 月 2 日	川村慎也	18,838	25

- 3. 各調査は、四万十市教育委員会が主体となって調査をおこなった。
- 4. 具同中山遺跡群は、平成13年に周知の埋蔵文化財包蔵地「具同中山遺跡」の範囲を加除修正し、「具同中山遺跡群」と名称を改めた。本文中では特に必要のない限り具同中山遺跡は具同中山遺跡群と読み替えて表記している。
- 5. 出土遺物等の整理作業は、四万十市教育委員会 生涯学習課 川村の指導のもと以下の参加者の助力を得た。 平成 18 年度 秋森正久、野町和人、安光七重 平成 19 年度 秋森正久、野町和人、安光七重
- 6. 本書の執筆、編集は四万十市教育委員会 生涯学習課 川村が担当した。
- 7. 調査の実施と本書の作成にあたり、高知県教育委員会文化財課、(財)高知県埋蔵文化財センター諸氏よりご指導、ご助言を、また当市関係課、工事関係者、ならびに近隣にお住まいの方々には多大なご支援とご協力をいただいた。ここに銘記して謝意を表す。
- 8. 当調査に関わる遺物、写真、図面等は、四万十市教育委員会 生涯学習課 [TEL0880(34)7311] において保管している。
- 9. なお、旧中村市は平成17年4月に旧西土佐村と市町村合併を行い四万十市となっている。本文中ではこれをうけて固有名詞等必要な場合を除き、中村市を四万十市と置き換えて表記している。

目 次

原色	写真	义	版
----	----	---	---

例 言

第 | 章 調査地点周辺の遺跡 1

第Ⅱ章 試掘確認調査の成果 11

写真図版

報告書抄録

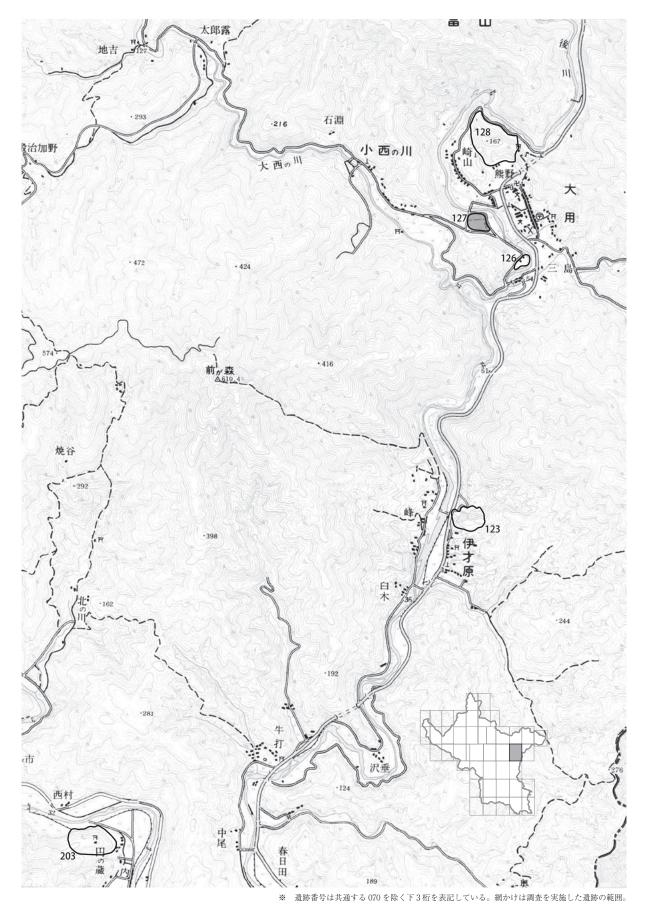
図版目次

第Ⅰ章	調査地点周辺の遺跡		具同中山	遺跡群(2002014)	
図 1	調査地点周辺の遺跡分布図1(1/25000)	2	図 32	調査地点位置図	35
図 2	調査地点周辺の遺跡分布図2(1/25000)	3	図 33	トレンチ配置図(1:1500)	35
図 3	調査地点周辺の遺跡分布図3(1/25000)	4	図 34	柱状図 (1:40)	37
図 4	調査地点周辺の遺跡分布図4(1/25000)	5	図 35	Tr-2 5層上面遺構平面図 (1:40)	38
図 5	調査地点周辺の遺跡分布図5(1/25000)	6	図 36	Tr-3 6層上面遺構平面図 (1:40)	40
図 6	調査地点周辺の遺跡分布図6(1/25000)	7	図 37	Tr-3 9層上面遺構平面図 (1:40)	41
			図 38	Tr-4 4層上面遺構平面図 (1:40)	43
第∥章	試掘確認調査の成果		図 39	Tr-4 7層上面遺構平面図 (1:40)	44
国見南沖	中屋敷遺跡		図 40	Tr-4 柱穴断面図 (1:40)	45
図 7	調査地点位置図	12	図 41	出土遺物実測図1	47
図 8	トレンチ配置図(1:1000)	12	図 42	出土遺物実測図 2	49
図 9	出土遺物実測図	13	図 43	出土遺物実測図3	50
図 10	Tr-8 平面図(1:100)	13	図 44	出土遺物実測図4	51
図 11	柱状図(1:40)	15	九樹城跡	(2002015)	
具同中山	山遺跡群(97-5GN)		図 45	調査地点位置図	52
図 12	調査地点位置図	16	図 46	トレンチ配置図	52
図 13	トレンチ配置図 (1:1000)	16	図 47	出土遺物実測図	53
図 14	柱状図(1:40)	17	三里遺跡	(2002018)	
図 15	出土遺物実測図	18	図 48	調査地点位置図	55
大屋敷遺	遺跡		図 49	トレンチ配置図 (1:5000)	56
図 16	調査地点位置図	20	図 50	柱状図1 (1:40)	57
図 17	トレンチ配置図(1:1000)	20	図 51	柱状図 2(1:40)	58
図 18	柱状図(1:40)	21	図 52	柱状図 3(1:40)	59
具同中山	山遺跡群		図 53	柱状図 4	60
図 19	調査地点位置図	23	図 54	柱状図 5	61
図 20	トレンチ配置図(1:1500)	23	図 55	遺構平面図 (1:20)	63
図 21	柱状図(1:40)	24	図 56	出土遺物実測図1	66
図 22	出土遺物実測図	24	図 57	出土遺物実測図 2	69
スゲンタ	での駄場遺跡(2001001)		図 58	出土遺物実測図3	70
図 23	調査地点位置図	26	図 59	出土遺物実測図4	71
図 24	トレンチ配置図(1:1000)	26	具同中山	遺跡群(2003018)	
図 25	柱状図1 (1:40)	28	図 60	調査地点位置図	72
図 26	柱状図 2(1:40)	29	図 61	トレンチ配置図 (1:1000)	72
具同中山	山遺跡群(2002013)		図 62	柱状図(1:40)	73
図 27	調査地点位置図	30	遺物観察	表	75 ~ 79
図 28	トレンチ配置図(1:2000)	30			
図 29	柱状図1 (1:40)	31			
図 30	柱状図2	32			
図 31	出土遺物実測図	33			

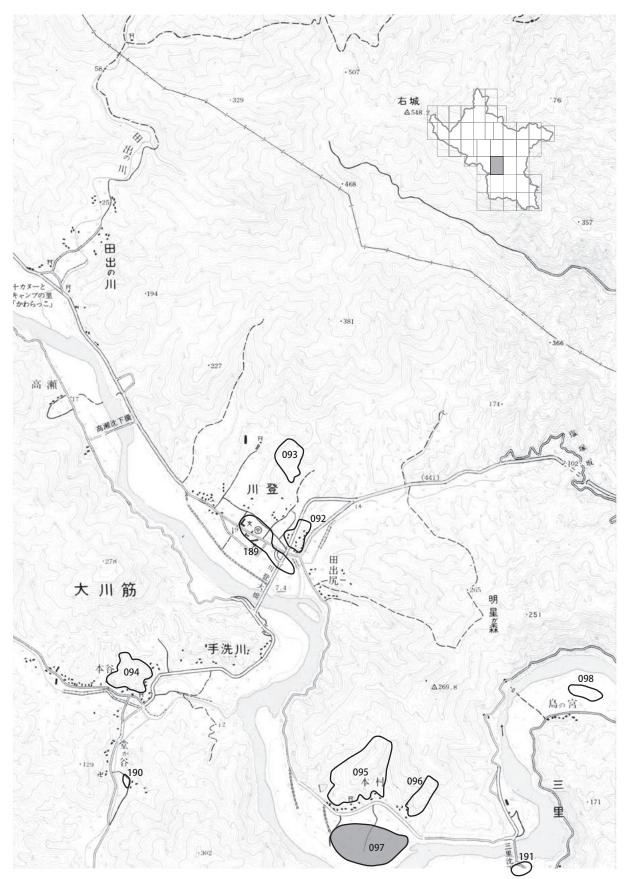
第 | 章 調査地点周辺の遺跡



▶図1 調査地点周辺の遺跡分布図1 (1/25000)

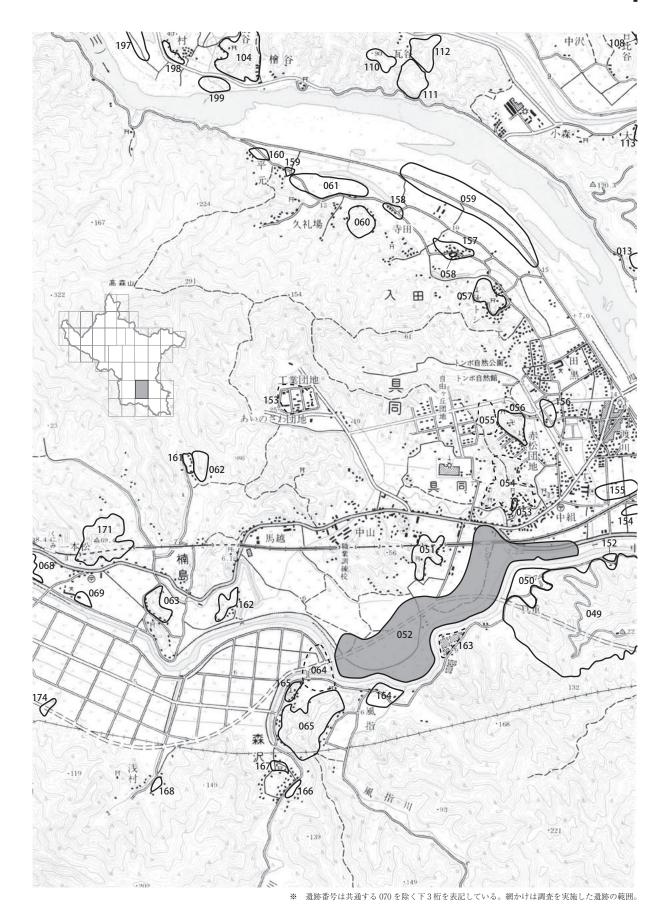


▶図2 調査地点周辺の遺跡分布図2(1/25000)

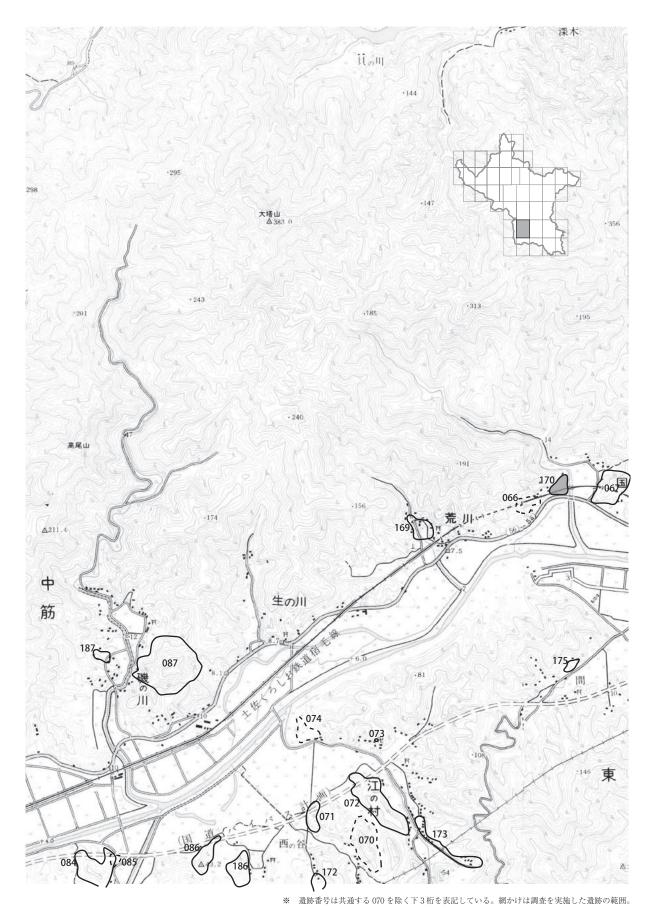


※ 遺跡番号は共通する 070 を除く下 3 桁を表記している。網かけは調査を実施した遺跡の範囲。

▶図3 調査地点周辺の遺跡分布図3(1/25000)



▶図4 調査地点周辺の遺跡分布図4(1/25000)



▶図5 調査地点周辺の遺跡分布図5(1/25000)



※ 遺跡番号は共通する 070 を除く下 3 桁を表記している。網かけは調査を実施した遺跡の範囲。

▶ 図 6 調査地点周辺の遺跡分布図 6 (1/25000)

図	番号	名 称	所 在 地	種別	現状	時 代	備考
図 1	070125	中谷遺跡	片魚字中谷	散布地	畑	室町	
図 1	070207	大屋敷遺跡	大屋敷字シウダイ	散布地	畑	室町	
図 2	070123	伊才原城跡	伊才原字大本山	城跡	山林	中世	
図 2	070126	大用遺跡	大用字堂の駄場 923 他	散布地	畑	縄文	
図 2	070127	スゲンダの駄場遺跡	大用字スゲンダの駄場	散布地	畑	縄文	
図 2	070128	岡野ノ城跡	大用字城ノ下	城跡	山林	中世	
図 2	070203	内川城跡	蕨岡乙字イデノ山	城跡	山林	中世	
図3	070092	塩塚城跡	川登字コエト山	城跡	山林・道路	中世	
図3	070093	タキモト城跡	川登字横ジリ山	城跡	山林	中世	
図 3	070094	手洗川城跡	手洗川字中山	城跡	山林	中世	
図 3	070095	亜瀬々城跡	三里字レンダイジ山	城跡	山林	中世	
図 3	070096	本願寺山城跡	三里字本願寺山	城跡	山林	中世	
図 3	070097	三里遺跡	三里字ナガシタ他	散布地	水田・畑	縄文	
図 3	070098	島の宮遺跡	三里字島の宮	散布地	畑	弥生	

図	番号	名 称	所 在 地	種別	現状	時代	備考
図 3	070189	川登遺跡	川登字タド野他	散布地	畑	縄文・中世	
図 3	070190	レイコ遺跡	手洗川字レイコ	散布地	畑	中世	
図3	070191	三里深木遺跡	三里字ナガレタ	散布地	水田・畑	縄文	
図 4	070013	吹越山遺跡	中村百笑町字吹越山	散布地	山林	弥生	
図 4	070049	香山寺跡	坂本字川平山	社寺跡	山林	中世・近世	
図 4	070050	具重遺跡	坂本字具重	祭祀遺跡	河川敷	古墳	ほぼ消滅
図 4	070051	近沢城跡	具同字内沢南谷	城跡	山林	中世	
図 4	070052	具同中山遺跡群	具同字中山・ボケ・東神木・ 船付場等	祭祀•集落跡	水田・畑等	弥生~中世	古墳時代が中心
図 4	070053	西和田遺跡	具同字西和田	散布地	畑	弥生	
図 4	070054	栗本城跡	具同字栗本城	城跡	山林	中世	消滅
図 4	070055	扇城跡	具同字扇城	城跡	山林	中世	
図 4	070056	ナリカド城跡	具同字小市	城跡	山林	中世	
図 4	070057	長崎城跡	入田字天王山	城跡	山林	中世	
図 4	070058	秋トシ城跡	入田字秋トシ	城跡	山林	中世	
図 4	070059	入田遺跡	入田字石鎚・佐田芝	散布地	水田・畑	弥生	
図 4	070060	本井城跡	入田字城山	城跡	山林	中世	
図 4	070061	源池遺跡	入田字源池	散布地	水田・畑	弥生・中世	
図 4	070062	小才田城跡	楠島字サイタ	城跡	山林	中世	
図 4	070063	楠島城跡	楠島字大峯	城跡	山林	中世	
図 4	070064	船戸遺跡	森沢字船戸他	祭祀遺跡	水田・畑	古墳	
図 4	070065	森沢城跡	森沢字ジョヂウ山	城跡	山林	中世	
図 4	070067	国見城跡	国見字天神谷・天神	城跡	山林	中世	
図 4	070068	国見遺跡	国見字駄場	散布地	畑	縄文・古墳	
図 4	070069	東中筋小学校校庭遺跡	国見字北ナンゴウ	散布地	畑	古墳	
図 4	070104	佐田城跡	佐田字古城山	城跡	山林	中世	
図 4	070108	回城跡	敷地字峠	城跡	山林	中世	
図 4	070110	鉢力森遺跡	岩田字鉢力森	散布地	山林	弥生	
図 4	070111	川原ハチカ森古城跡	岩田字八ノ森	城跡	山林	中世	
図 4	070112	川原城跡	岩田字川原山	城跡	山林	中世	
図 4	070113	山内忠直の墓	岩田字大用寺山	墓	墓地	近世	市史跡
図 4	070152	具重下遺跡	坂本字クダシバノ谷	散布地	水田・畑	中世	
図 4	070153	相ノ沢城跡	具同字城谷	城跡	工業団地	中世	消滅
図 4	070154	永田遺跡	具同字永田他	散布地	水田・畑	中世	
図 4	070155	五反田遺跡	具同字五反田他	散布地	水田・畑	中世	
図 4	070156	田黒遺跡	具同字田中他	散布地	水田・畑・宅地	中世	
図 4	070157	秋トシ遺跡	入田字秋トシ	散布地	水田・畑・宅地	弥生・中世	
図 4	070158	今井遺跡	入田字今井	散布地	水田・畑	中世	

図	番号	名 称	所 在 地	種別	現 状	時 代	備	考
図 4	070159	自近遺跡	入田字自近 117 他	散布地	水田・畑	縄文・中世		
図 4	070160	平元遺跡	入田字自近 138 — 1 他	散布地	水田・畑	中世		
図 4	070161	小才田遺跡	楠島字サイタ	散布地	畑·宅地	中世		
図 4	070162	楠島西城跡	楠島 1381 他	城跡	畑・山林	中世		
図 4	070163	アゾノ遺跡	森沢字アゾノ	集落跡	養鶏場	中世	ほぼ消滅	
図 4	070164	風指遺跡	森沢字風指	集落跡	水田・畑	弥生・平安 ・中世		
図 4	070165	森沢北ノ城跡	森沢字西トヲケ谷	城跡	山林	中世		
図 4	070166	ミヤゾエ遺跡	森沢字ミヤゾエ	散布地	水田・畑	平安・中世		
図 4	070167	コヲヤバタ遺跡	森沢字コヲヤバタ	散布地	水田・畑	平安・中世		
図 4	070168	浅村遺跡	森沢字東谷口	散布地	水田・畑	中世		
図 4	070171	大才田城跡	国見字影平山	城跡	山林	中世		
図 4	070174	間城跡	江ノ村字トウマンノウ子	城跡	山林	中世		
図 4	070197	池本遺跡	佐田字馬染川原他	散布地	水田・畑	弥生・奈良~中世		
図 4	070198	佐田本村遺跡	佐田字上屋敷	散布地	水田・畑	中世		
図 4	070199	溝口遺跡	佐田字溝口	散布地	水田・畑	弥生・中世		
図 5	070066	国見西ノ城跡	国見字谷ヤシキ他	城跡	山林	中世	消滅	
図 5	070066	国見西ノ城跡	国見字谷ヤシキ他	城跡	山林	中世	消滅	
図 5	070067	国見城跡	国見字天神谷・天神	城跡	山林	室町		
図 5	070070	江ノ村西ノ城跡	江ノ村字西城	城跡	山林	中世	消滅	
図 5	070071	松ガハナ城跡	江ノ村字松ガハナ	城跡	山林	中世		
図 5	070072	江ノ古城跡	江ノ村字エノジョウ	城跡	山林	中世		
図 5	070073	小松谷寺墓	江ノ村字小松山・長法寺	墓	社寺	中世	市史跡	
図 5	070074	江ノ村遺跡	江ノ村字イゲの上	集落跡	畑・道路	弥生~近世		
図 5	070080	安宗城跡	横瀬字高尾山 2579 ~ 2582	城跡	山林	中世		
図 5	070084	長城跡	上ノ土居字中城	城跡	山林	中世		
図 5	070085	上ノ土居遺跡	上ノ土居字二ノへ峠	散布地	荒蕪地	弥生	消滅	
図 5	070086	久木ノ城跡	上ノ土居字村境山	城跡	山林	中世		
図 5	070087	磯ノ川城跡	磯ノ川字猿田山・高畑山	城跡	山林	中世		
図 5	070169	荒川遺跡	荒川字中平屋敷他	散布地	畑・宅地	中世		
図 5	070170	国見南沖屋敷遺跡	国見字南沖屋敷	散布地	水田・畑	中世		
図 5	070173	江ノ村本村遺跡	江ノ村字ナカヤシキ	散布地	畑・宅地	中世		
図 5	070175	間遺跡	江ノ村字ヲカヤシキ	散布地	水田・畑	中世		
図 5	070186	西ノ谷城跡	江ノ村字ヲカヤシキ他	城跡	山林	中世		
図 5	070187	千蔵院遺跡	磯ノ川字千蔵院	散布地	畑·宅地	中世		
図 6	070083	九樹城跡	九樹字古城山	城跡	山林	中世		
図 6	070184	九樹遺跡	九樹字谷ノ前	散布地	水田	中世		
図 6	070185	上ノ土居城跡	上ノ土居字桧谷山	城跡	山林	中世		

第||章 試掘確認調査の成果

国見南沖屋敷遺跡

所 在 地 国見字南沖屋敷

調査期間 1990.12.11 ~ 1990.12.25

調査原因 市道敷設

調査面積 252 ㎡ (12,400 ㎡)

時 代 中世~近世

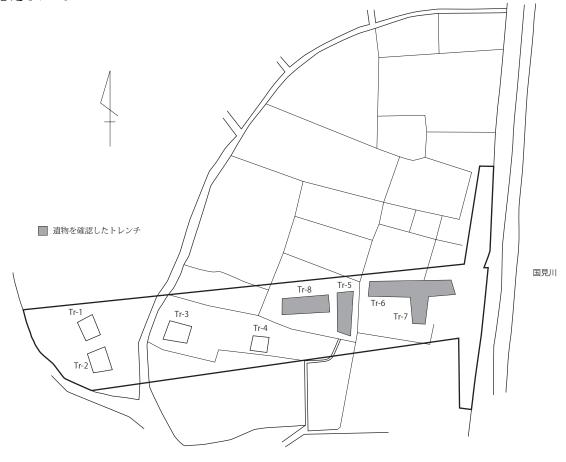
調查種別 試掘確認調查

国/見 図 7 調査地点位置図

▼ 遺跡の概要

国見南沖屋敷遺跡は、中筋川及び国見川と東側に伸

びた丘陵によって区画された沖積地に立地する。これまでに本格的な発掘調査はされておらず、分布 調査によって中世段階の遺物が散布することが知られている。遺跡の背後の丘陵上には国見西ノ城跡 (現在は消滅)が、国見川を挟んだ東側には国見城跡が立地する。字名に加え、両中世城跡の立地から も当該時期の集落が展開することは想像に難くなく、中世段階の集落址が残存する可能性が高いもの と想定された。



▶図8 トレンチ配置図(1:1000)

▼ 調査の経過

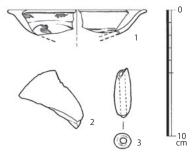
当該調査はくろしお鉄道中村宿毛線建設工事に起因する試掘確認調査である。平成2年度着工予定 の線路延長工事に先立って、埋蔵文化財の有無及び取り扱いの基礎資料を得るために調査を実施する はこびとなった。

▼ 調査の概要

国見南沖屋敷遺跡については過去に発掘調査が実施された経緯はない。今回の調査では遺跡の残存 状況を明らかにするため、対象範囲に対してトレンチを8カ所設定し、堆積層の確認及び遺構・遺物 の検出を行った。なお、埋蔵文化財を確認したトレンチについては適宜トレンチを拡張して残存状況 を把握するよう努めた。

基本層序 現地はほ場もしくは畑地として利用されており、これにより地表に近い堆積はグライ化の 進み具合等に差異が認められるものの、大まかには耕作土、赤褐色極細粒砂層、グライ化するシルト層、 礫層の順に堆積している。最下層の礫層はトレンチによって検出される高さに差が認められ旧地形が 河川による浸食作用等で複雑に変化していたことが看取される。

出土した遺物と遺構 8箇所のトレンチのうち、Tr-5~8において中世~近世にかけての遺物が確認されている。遺物出土量はTr-6が最も多く包含層も厚い。遺物の大半はローリングをうけた細片で図示できるものはわずかであるが、器面および胎土の観察から近世期のものと中世段階の2時期の遺物が出土している。主要な遺物は青磁片および近世陶磁器、土錘等である(図9)。

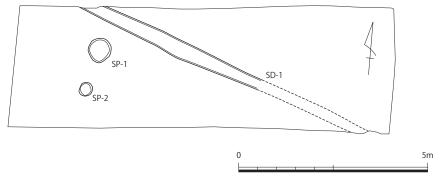


▶ 図 9 出土遺物実測図

Tr-8 では溝及び柱穴を検出した。溝は幅 40cm、深さ 10cm を測り、

南西にむかって 8m ほど直線的に伸びている。溝は調査区外へ続くため全容はあきらかでないが敷地内を区画するものと想定される。

また、溝の南側で2基の柱穴を検出している。いずれも深さ10cm ほどしか残存しておらず対応する柱穴を確認し得てはいないが、溝の北側、南側で遺構分布に疎密が生じていることは注意が必要であろう。柱穴の埋土中より18世紀頃の所産と考えられる陶磁器細片が出土する。



▶ 図 10 Tr-8 平面図(1:100)

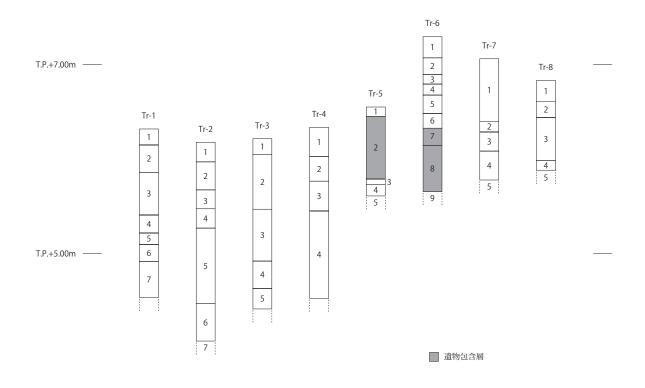
▼まとめ

今回の調査では、近世期の遺構、および中世から近世にかけての少量の遺物が出土した。当初期待された中世城郭に連携する集落址の確認には至らなかったものの、今回の調査で確認された包含層や遺物の存在は周辺に当該時期の集落址が残存する可能性を十分に示唆するものと言える。

また、中筋川流域に残存する中世期の城郭址と現在の集落を概観すると、開発行為による改変が生じている地域は少なく、概ね旧来の集落景観を残存したものが多くある。これらの集落景観を長宗我部地検帳等の記載と比較するとホノギと現在の集落における土地利用が中世期から大きな変更をされることなく続いていることがわかる。

こういった現状を考慮すると、国見南沖屋敷遺跡も近世期の景観と中世期の景観が大きな差を生じることなく営まれていた可能性もある。

今次調査のような狭小な調査範囲の成果でこれらの課題に指針を示すことは難しいが、今後の調査 成果の蓄積をまって検討を試みたい。



▼	Tr-1

1. 耕作土

2. 青灰色礫土(旧耕作土)

3. 礫土

4. 赤茶色砂質土

5. 青灰色砂質土

6. 暗灰色粘質土

7. 礫土

▼ Tr-2

1. 耕作土

2. 礫層

3. 茶褐色砂質土

4. 礫層

5. 青灰色砂質土 植物遺体含む

6. 暗青灰色砂質土

7. 礫層

▼ Tr-3

1. 耕作土

2. 茶褐色礫土

3. 礫層

4. 青灰砂質土

5. 礫層

▼ Tr-4

1. 耕作土

2. 礫土

3. 茶褐色粘質土

4. 礫層

▼ Tr-5

1. 耕作土

2. 礫土

3. 青灰色粘質土

4. 茶褐色粘質土

5. 礫層

▼ Tr-6

1. 耕作土

2. 礫土

3. 赤褐色粘質土

4. 礫土

5. 赤茶色粘質土

6. 礫土

7. 青灰色粘質土

8. 暗茶色粘質土

9. 赤茶色粘質土

▼ Tr-7

1. 耕作土

2. 茶灰色粘質土

3. 淡青茶色土(礫を含)

4. 暗茶褐色土(礫を含)

5. 茶褐色礫土

▼ Tr-8

1. 耕作土

2. 赤茶色粘質土

3. 礫土4. 赤茶色粘質土

5. 礫層

▶ 図 11 柱状図 (1:40)

具同中山遺跡群 (97-5GN)

所 在 地 具同字南カギダ 3215-2 他

調査期間 1997.11.1 ~ 1997.11.14

調查原因 土地区画整理事業

調査面積 60 m² (1,080 m²)

時 代 弥生~古墳時代

調查種別 試掘確認調查



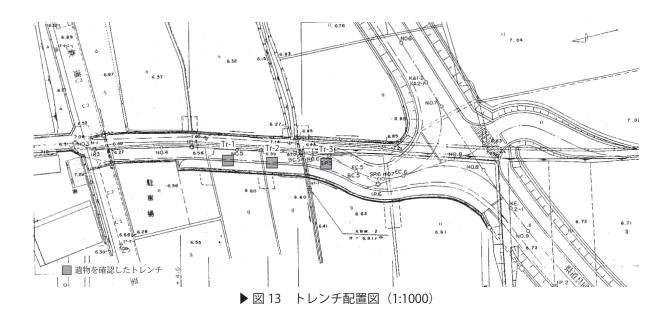
▼ 遺跡の概要

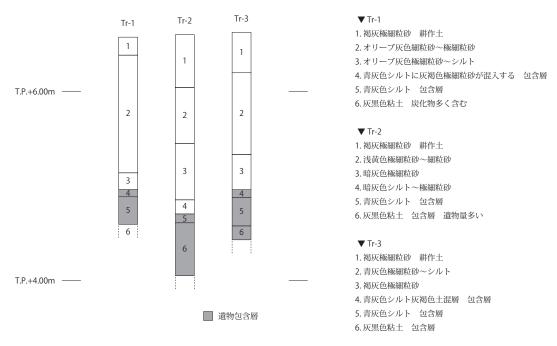
具同中山遺跡群は、中筋川下流左岸の低位沖積平野上に所在する。縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡であり、各々の時代について良好な状態で遺構・遺物が残存する。県道中村下ノ加江線にともなう発掘調査によって当該遺跡について多くの知見が得られたとともに、遺跡範囲が従前より大きく拡大することも明らかとなった。出土する遺構群ではとくに古墳時代における祭祀跡、倉庫群等が具同中山遺跡群の特徴をよく表すものとして知られる。

▼ 調査の経過

当該調査は、市道高橋伊間線敷設工事に先立つ試掘確認調査である。

近接地では上述した県道中村下ノ加江線に伴う発掘調査の成果が報告されており、当該地点においても埋蔵文化財が残存している可能性が非常に高いものと想定された。これをうけて工事着工に先立ち、埋蔵文化財の取り扱い等を検討するための基礎資料を得るため試掘確認調査を実施するはこびとなった。





▶ 図 14 柱状図 (1:40)

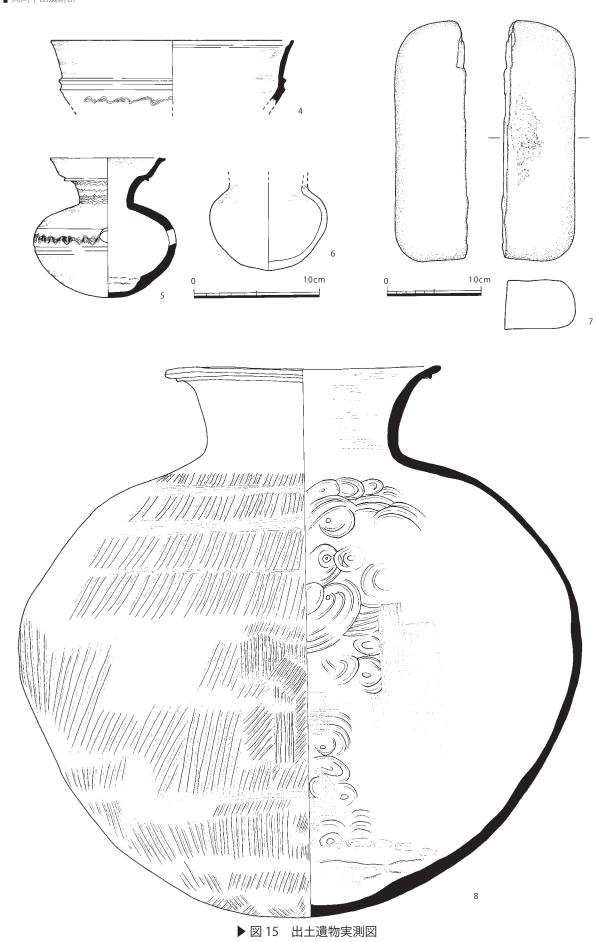
▼ 調査の概要

当該調査は調査対象地内の用地買収が終了している区域について、任意のトレンチを3箇所設定し、 遺構・遺物の発見に努めた。

基本層序 各トレンチにおける層序は、I. 表土、II. ややグライ化する極細粒砂層、III. 褐色極細粒砂層、IV. グライ化するシルト層の 4 層に大別できる。柱状図に示す $1 \sim 3$ 層が $I \sim III$ 層に対応し、IV 層が遺物を含む包含層である。IV 層では青灰色シルト層と暗灰色シルト層が互層をなして堆積しており、層中に古墳時代の遺物が含まれる。なお、IV 層以下 (地表下約 3m 付近) で弥生時代の所産と考えられる土器片を極少量確認している。トレンチが狭小で、作業に必要な空間が確保できず危険を伴うためトレンチ内での調査は断念したが、IV 層以下に弥生時代の包含層が存在することについては今後注意が必要である。

出土した遺物と遺構 設定した3箇所のトレンチのすべてにおいて遺物が確認されている。いずれも古墳時代の所産と考えられる須恵器・土師器を中心とする土器片で、Tr-2で最も多く出土する。また、Tr-3においては地表より3m下部で少量の弥生土器片を確認しているが、狭小なトレンチ内での調査は危険を伴うため遺物を確認するに止めた。出土遺物の中で図化できた遺物はわずかであるが以下に概要を記す。4は須恵器無蓋高坏の坏部片で、稜の下段に波状文が施される。5は頸部から大きく外反し段をもつ腿である。頸部及び体部に波状文からなる文様帯を有し、肩部が大きく張る。8は大型の甕で、頸部から外反する口縁に段を有する。体部外面には叩き痕が、内面には同心円文が観察される。7は砂岩を素材とする砥石である。擦痕は顕著でないが、片側に敲打痕が多く残る。

遺構については Tr-3 の 3 層上面で柱穴 1 基を確認したのみである。埋土中に遺物を含まず、上下の 堆積中にも遺物が含まれないことから遺構の時期の特定には至らない。しかし、古墳時代の包含層が 4 層以下であるため、これよりも新しい時期を想定すべきであろう。



18

▼まとめ

今回の調査では古墳時代の遺物及び包含層の存在を確認した。出土遺物の時期は周辺で確認されている遺物・遺構の時期と大きな差はなく、当該地域に広がる集落址の一端を確認したものと考えられる。

なお、今回の調査地点に隣接する県道北側では古墳時代の柱穴群及び弥生時代の所産と考えられる 微隆起突帯をもつ土器片等が確認されており、周辺に同時期の集落が展開していたことがわかる。これは、今次調査で確認した少量の弥生土器片の存在とも対応するものであり、周辺の調査時には弥生 時代の遺構面の存在に留意が必要となろう。

また、これに反して、県道付近で顕著に見られる中近世の集落の広がりは今回確認できていない。 これは県道付近で顕著に見られる中近世の集落址の北限を示すものであろうか。中近世の集落域の広 がりについては今後の調査成果をまって検討を重ねる必要がある。

具同中山遺跡群は市内でも古津賀遺跡群とならんで広域に広がる複合遺跡であり、遺跡内では県道敷設以後、民間開発工事等によって調査が増加している。今後このような調査成果の蓄積によって遺跡における各時代の様相が明らかにされることが期待される。

なお、当試掘確認調査を経て、平成10年には道路敷設に先立つ本発掘調査が実施された。この本発掘調査については期を改めて報告することとしたい。

大屋敷遺跡

所 在 地 大屋敷字ナカハラ、ジチウ、クワノキダ

調査期間 1998.2.12 ~ 1998.2.26

調査原因 中山間総合整備事業事業

調査面積 75 ㎡ (20,000 ㎡)

時 代 中世~近世

調查種別 試掘確認調查

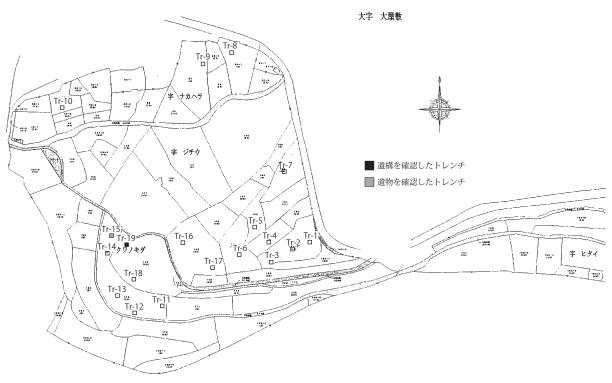


▶ 図 16 調査地点位置図

▼ 遺跡の概要

大屋敷遺跡は、市街地より後川をさかのぼること約25km、後川最上流域にほど近い右岸側の河岸段 丘上に立地する。段丘は河川による解析が進み、遺跡の最高所と河川の比高差は 20m 以上を測る。当 該遺跡について過去に発掘調査が実施された経過はなく、表面採取によって散布地として周知されて いる。採取されている遺物は石鏃及び中近世の所産と考えられる陶磁器片等である。

また、大屋敷遺跡周辺は、承久の乱によって配流となった土御門上皇に関わる伝承をもつ社寺が存 在するなど歴史的な特徴のある地域でもある。



▶図 17 トレンチ配置図 (1:1000)

T.P.+158.00m		T.P.+152.00m		
3	= 2 = 5	T.P.+150.00m——	Tr-16 1 2 3 4 5 4 4	
▼ Tr-2 1. 表土 2. 床土 3. アカホヤ 4. アカホヤ(橙色)	強い)	T.P.+148.00m——		
 5. 礫層 6. 灰黄色粘質土層 7. 灰黄褐色粘質土 ▼ Tr-9 1. 表土及び床土 2. 粘礫層 3. 砂礫層 4. 礫層 ▼ Tr-15 		T.P.+146.00m——	Tr-15 1 2 3 4 5	_
 表土 床土 旧表土 アカホヤ アカホヤ(礫混 灰黄褐色粘質土 ▼ Tr-16 表土及び床土 盛土 礫層 灰橙色粘質土層 明灰褐色砂礫層 暗灰褐色砂礫層 	層		6	

▶図 18 柱状図 (1:40)

▼ 調査の経過

当該調査は、中山間地域総合整備事業として中村耕地事務所が計画したほ場整備事業に先立って実施された試掘確認調査である。工事着手に先立ち、大屋敷遺跡の範囲、本発掘調査の要不要を判断する基礎資料とするため調査を実施した。

▼ 調査の概要

調査は対象範囲内に任意の 2m × 2m ほどのトレンチを 19 箇所設定し、重機によって表土を除去したのち人力を併用して調査を進めた。なお、以下では煩雑化をさけるため主要なトレンチについてのみ柱状図を作成し、概略を記すこととする。

基本層序 層序は、表土層、アカホヤ火山灰を含む黄橙色シルト層、暗褐色極細粒砂層、礫層の順に 堆積し、盛土層及び崩落による堆積が顕著なトレンチを除き、基本的に層序は共通する。火山灰を含 む堆積の認められないトレンチの多くは削平を受けた痕跡が認められる。

出土した遺物と遺構 今回の調査で遺物が確認されたのは Tr-19 のみである。 Tr-19 では耕作土下部で 青磁片を 1 点確認している。

遺構は Tr-15 で 1 基の柱穴を確認した。アカホヤ火山灰を含む黄橙色シルト層の上面で検出された 遺構であり、直径約 20cm、深さ約 36cm を測る。埋土中に遺物は見られないが、被熱したこぶし大の 礫が出土した。

▼まとめ

今回の調査で確認し得た遺構・遺物は僅少であり、遺構については時期も明確ではない。

調査範囲内では、明確な遺物・遺構の分布を確認し得ていなかったが、今回の調査対象範囲外の県道 北側の畠地を踏査すると、頁岩やチャートを素材とする石鏃及び剥片、縄文土器等が発見された。採 取遺物の時期は縄文時代前期以降の所産と考えられるため、通常大きな堆積の乱れがなければ、これ らの遺物はアカホヤ火山灰を含む堆積の上部で出土するものと考えられる。

当該調査では、耕土直下でアカホヤ火山灰を含む堆積が見られることから、上記遺物を包含する堆積層はすでに削平を受けている可能性が高いものと考えられる。

これに関連して、明治時代において「おおつえ」と呼ばれる大規模な土砂崩れが起こったことが地元で語り継がれており、このような自然災害等の発生も遺跡の残存状況に大きな影響を与えているものと想定される。

具同中山遺跡群

所 在 地 具同字八反田 3189 番地 他

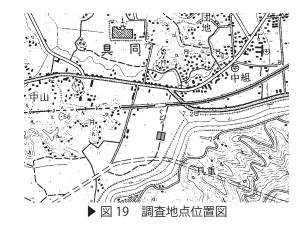
調査期間 2001.1.23 ~ 2001.2.9

調查原因 民間開発

調査面積 256 ㎡ (3,500 ㎡)

時 代 古墳時代・中世

調查種別 試掘確認調查



▼ 調査の経過

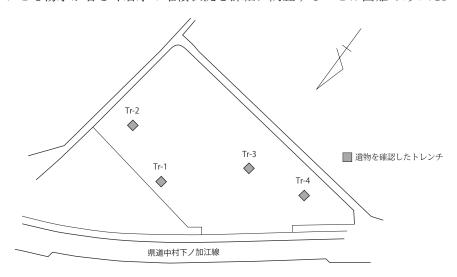
当該調査はしまむらグループが計画するファッションセンターしまむら店舗新設工事に先立つ試掘確認調査である。計画地点は、隣接地で県道敷設に伴う発掘調査が実施されており、埋蔵文化財が残存する可能性が非常に高いものと想定された。このため埋蔵文化財保護上の取り扱いについての基礎資料を得るべく、試掘確認調査を実施することとなった。

▼ 調査の概要

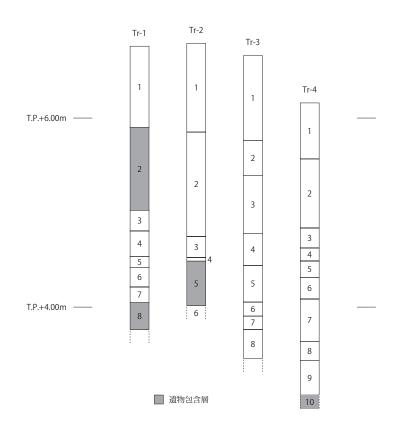
調査対象地内に任意に4箇所のトレンチを設定し、重機と人力を併用して調査を進めた。以下では 基本層序を記述したのちトレンチごとの状況を述べることとする。

基本層序 表土層及び近世の遺物を含む層位の直下に灰褐色の砂質シルト層が堆積する。周辺で実施されている既往の調査成果に比すと当該堆積が中世期の包含層に該当するものと考えられる。さらに下層では灰緑色と暗灰色のシルト層が互層に堆積する。このシルト層の下部で小礫を含む暗緑灰色シルト層が堆積し、その直下に古墳時代の遺物を含む明灰褐色シルト層が確認される。

なお、各トレンチとも湧水が著しく層序の堆積状況を詳細に調査することは困難であった。



▶図 20 トレンチ配置図 (1:1500)



▼ Tr-1

- 1. 表土及び近世層
- 2. 灰褐色砂質シルト層(包含層)
- 3. 暗灰緑色シルト層
- 4. 灰黑色粘質層
- 5. 明灰緑色粘質層
- 6. 濃灰緑色粘質層
- 7. 明灰黒色粘質層
- 8. 淡明灰黒色粘質層 (包含層)

▼ Tr-2

- 1. 表土及び近世層
- 2. 灰褐色砂質シルト層
- 3. 濃灰緑色シルト層
- 4. 明灰黒色粘質層 5. 淡灰黒色粘質層 (包含層)
- 6. 明灰黒色砂質シルト層

▼ Tr-3

- 1. 表土及び近世層
- 2. 灰褐色砂質シルト層
- 3. 暗灰黒色シルト層
- 4. オリーブ灰色シルト層
- 5. 明灰黒色砂質シルト層
- 6. 明オリーブ灰色粘質層
- 7. 明灰黒色粘質層 8. 明灰黒色砂質シルト層

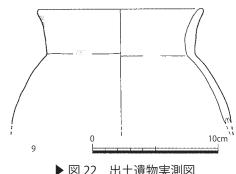
▼ Tr-4

- 1. 表土及び近世層
- 2. 灰褐色砂質シルト層
- 3. 暗灰黒色シルト層
- 4. オリーブ灰色シルト層
- 5. 明灰黒色砂質シルト層
- 6. 明オリーブ灰色粘質層 7. 明灰黒色粘質層
- 8. 濃灰緑色粘質層
- 9. 明灰黒色粘質層
- 10. 灰褐色粘質層 (包含層)

▶ 図 21 柱状図 (1:40)

Tr-1 当該トレンチでは2時期の包含層を確認した。中世の 包含層と考えられる2層からは土師器細片が確認されている。 また、8層から古墳時代の所産と考えられる土師器甕口縁部(9) が出土する。なお、いずれの包含層においても遺構は検出さ れていない。

Tr-2 5層より古墳時代の土師器片が出土する。遺物量は少な く、細片が多くを占める。復元及び図化できるものは出土し ていない。



▶ 図 22 出土遺物実測図

Tr-3 当トレンチの堆積は他のトレンチとはやや異なる状況を呈している。暗緑灰色シルト層が存在せ ず、前述トレンチの層序からすれば包含層と対応すると考えられる堆積においても遺物や炭化物は見 られない。

Tr-4 10 層より少量の土師器片が出土する。堆積状況は Tr-2 と似るが、包含層はやや下方で確認されている。このトレンチにおいても遺構を確認することはできなかった。

▼まとめ

今回の調査では、古墳時代及び中世の遺物を少量確認した。また、設定した4箇所のトレンチのうち良好な状態で遺物を確認し得たのはTr-1のみであった。

調査の結果、当該地点では古墳時代の包含層が現地表面より 2m 以上下位に存在することが明らかとなった。これは既往の調査成果と大きな齟齬をきたすものではないが、包含層に達するまでに法面に押されて調査区が狭小となり、十分な調査面積を保つことが難しい状況であった。

また、具同中山遺跡群は市内の他の遺跡と比べ、遺構の検出が難しい遺跡である。既往の調査においても埋土の判別がつきにくく遺物の分布状況から遺構を追認するケースも多い。加えて、当遺跡では遺物が一定のまとまりをもって出土する「集中」と呼称される土器群が多く確認されている。

このような状況を勘案すると、Tr-1 において検出された土器の出土状況は、付近に集落址もしくは 土器群が存在する可能性を示唆するものと考えられる。

スゲンダの駄場遺跡 (2002001)

所 在 地 大用字スゲンダ、谷田

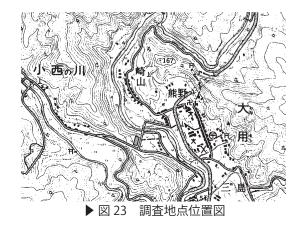
調査期間 2001.5.8 ~ 2001.5.11

調査原因 市道敷設

調査面積 32 m² (2,727 m²)

時 代 縄文時代(?)

調查種別 試掘確認調查



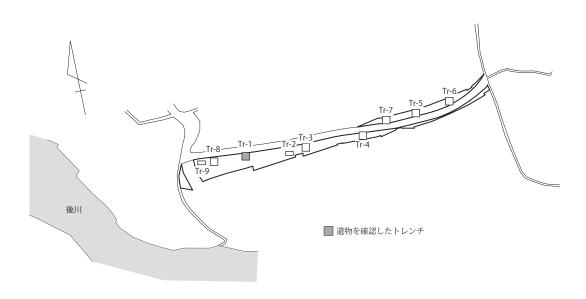
▼ 遺跡の概要

スゲンダの駄場遺跡は後川の上流部、住次郎川の河岸段丘上の平坦部に立地する。1972年に実施された分布調査によって存在が確認された遺跡で、石鏃や黒曜石の剥片が地表面で採集されている。この分布調査で採取された遺物は縄文時代の所産であると考えられる。

本遺跡では未だ本発掘調査は実施されておらず、遺跡の広がりや性格等は明らかにされていない。 スゲンダの駄場遺跡の周辺には石匙やスクレイパー等各種の石器が出土する大用遺跡も存在し、当該 地域には縄文時代の遺跡が点在していたことが推測される。

▼ 調査の経過

当該調査は、中村耕地事務所が平成13年度に計画する富山地区中山間総合整備事業に伴う市道の拡幅工事に起因する試掘確認調査である。工事計画地内にスゲンダの駄場遺跡が存在するため、埋蔵文化財の取り扱いについて検討する資料を得るため調査を実施するはこびとなった。



▶図 24 トレンチ配置図 (1:1000)

▼ 調査の概要

調査対象地内に9箇所のトレンチを設定し、重機を併用して調査を行った。以下では基本層序を説明したのち、特徴的な様相を示すトレンチについてその詳細を記載することとする。

基本層序 調査地は現在畑地として利用されている。表土および耕土を除去すると、黄橙色シルト層 が $1 \sim 1.2$ m 程堆積する。このシルト層には細粒砂~粗粒砂、亜円礫等が混入し、その割合によって $3 \sim 4$ 層に区別が可能であるが、いずれの堆積においても遺物は含まれない。なお、一部のトレンチでは当層の下半部にアカホヤ火山灰の混入も認められたが、その付近においても遺物は確認できない。 黄橙色シルト層を除去すると、段丘形成時の亜円礫層があらわれる。

調査地内の堆積を概観すると、標高の低いトレンチにおいては黄橙色シルト層が厚く堆積し、高いトレンチでは同層が薄く、浅い位置で段丘礫層に達する傾向が見受けられる。

今回の調査においては、Tr-1の耕土直下で確認した土器細片を除いて遺物は出土しておらず、明確な包含層を確認していない。

Tr-1 今回の調査で唯一遺物を確認したトレンチである。遺物は耕土を除去した直下で検出される黄灰 色シルト層(3層)より出土した。土器片は著しく摩滅した細片で、胎土等の観察から縄文土器であろ うと思われるが詳細はあきらかでない。

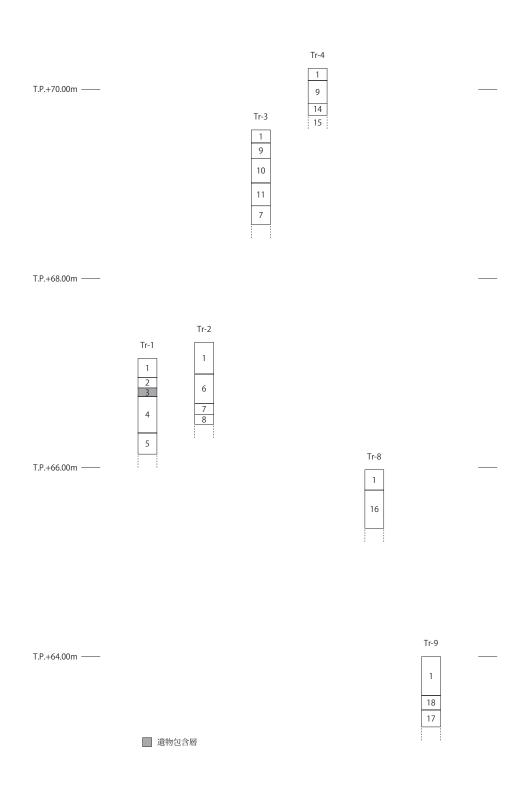
Tr-6・7 調査区のなかで最も高所に設定したトレンチである。段丘礫層に至るまでの黄灰色シルト層 (12層) にアカホヤ火山灰を含むブロックが少量混入する。なお、この堆積は多くのブロックによって 構成されておりプライマリな堆積とは考えがたい。Tr-4 においても対応すると思われる層位を確認しているが、Tr-14 ではアカホヤ火山灰はみられない。

Tr-9 設定したトレンチの中でもっとも低位にあるトレンチである。現状は荒廃地であるが、石垣等の施設が残存し、平坦な面が形成されている。現況地盤面から浅いところで礫層に達することから整地時に黄橙色シルト層が削平されているものと考えられる。

▼まとめ

今回の調査では、明確な遺構及び遺物ともに確認されなかった。唯一 Tr-1 で出土した遺物も摩滅が著しく、原位置を止めた出土状況とは考えがたい。1972 年の踏査時の表採場所は明らかでないが、当該調査の近隣に埋蔵文化財が残存する可能性は低いものと考えられる。

現地は斜度の強い丘陵地であり、遺跡が広く展開することは考えがたい。今後は、さらに周辺に視野を拡げスゲンダの駄場遺跡の範囲を明らかにするとともに、調査成果の蓄積を待って遺跡の性格についても検討を重ねてゆきたい。



▶ 図 25 柱状図 1 (1:40)

T.P.+76.00m ——		Tr-6 1 13 10 14 12		_
T.P.+74.00m ——	Tr-5 1 9 10 11 7		Tr-7	_
			9 14 15	
T.P.+72.00m ——				

- 1. 灰色極細粒砂 (~細粒砂)
- 2. 赤褐色極細粒砂 (~シルト)ブロック状の堆積
- 3. 黄灰色シルト (~極細粒砂) 黄橙色ブロック若干混入 遺物微量含む
- 4. 黄灰色極細粒砂 (〜細粒砂) 均質な粘質土
- 5. 灰黄色極細粒砂 (〜細粒砂)やわらかい粘質土
- 6. 黄色シルト (~極細粒砂) ϕ 3 ~ 5cm 細礫 10 ~ 5% 混入
- 7. 黄灰色極細粒砂 (~シルト) ϕ 2 ~ 3cm 細礫 5% ほど混入
- 8. 黄橙色極細粒砂 (〜シルト) 若干細粒砂 (〜中粒砂) 亜角礫 10% ほど含む
- 9. 赤褐色シルト (~極細粒砂) しまった粘質土
- 10. 赤褐色若干黄灰色シルトが混入
- 11. 赤褐 (〜灰) 色極細粒砂 (〜細粒砂) 若干混入 弱い砂質
- 12. 黄灰色シルト (~極細粒砂) に ϕ 10 ~ 30mm 亜角礫 30 ~ 40% 混入
- 13. 赤灰(〜褐)色極細粒砂 (〜細粒砂) やわらかい粘質層 ϕ 5 \sim 10mm の細礫含む
- 14. 黄灰色粘質層 ϕ 3 \sim 7cm 程のアカホヤ火山灰ブロックが 5 \sim 10% 程混入
- 15. 赤褐色シルト (~極細粒砂) 若干 ϕ 10 ~ 20mm の細礫含む 均質な粘質層
- 16. 明黄褐色極細粒砂 (~シルト)
- 17. 赤褐色シルト 9 層によく似る
- 18. 赤灰褐色極細粒砂と 17 層との混合層
- ※ 各層名は全ての柱状図の層名に共通する。

▶ 図 26 柱状図 2 (1:40)

具同中山遺跡群 (2002013)

所 在 地 具同字カヌキ 3269-1 外 29

調査期間 2003.2.17 ~ 2003.3.4

調查原因 民間開発

調査面積 165 ㎡ (16551 ㎡)

時 代 弥生時代~古墳時代

調查種別 試掘確認調查

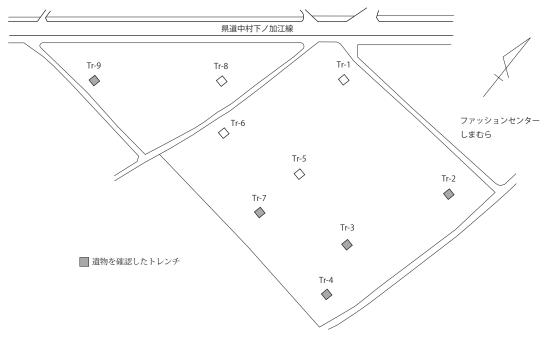


▼ 調査の経過

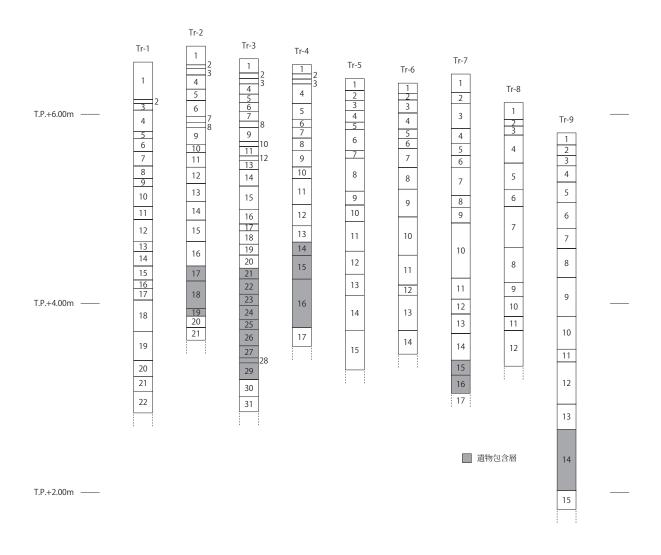
当該調査は株式会社ダイナムが具同字カヌキ 3269-1 外 29 にて計画した遊技場新設工事に係る試掘確認調査である。当該地は埋蔵文化財包蔵地として周知されている具同中山遺跡群の範疇にあるため、事前に株式会社ダイナムより市教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の取扱いについての照会があった。その後の協議の結果、事業者の協力により現地にて試掘確認調査を行うはこびとなった。

▼ 調査の概要

調査は、敷地内における埋蔵文化財の残存状況が把握できるよう 3m 四方もしくは 5m 四方のトレンチを 9 箇所設定して実施した。機械掘削には油圧ショベル PC-200 を使用し、トレンチ内の層序確認や遺物の取上げ等を人力にて行った。トレンチ掘削後、写真撮影及び土層断面の実測を行い、トレンチを埋め戻した。



▶図 28 トレンチ配置図 (1:2000)



▼ Tr-1

- 1 耕作十
- 2. N5/0 灰色シルト質極細粒砂 均質で竪緻な堆積 粘質を呈する
- 3.2.5Y6/2 灰黄色シルト質極細粒砂 微量マンガン沈着する
- 4. 10YR6/3 にぶい黄橙色極細粒砂~シルト マンガン沈着する
- 5. 2.5Y6/1 黄灰色シルト 均質強粘 鉄分沈着あり 微量緑斑あり
- 6. 5Y6/2 灰オリーブ色シルト質極細粒砂 堅緻 褐灰色シルト質極細粒砂
- 7. 灰褐色シルト質極細粒砂
- 8. 灰褐色シルト質極細粒砂
- 9. 灰褐色シルト質極細粒砂
- 10. 青褐灰色粘土質シルト
- 11. 青灰色極細粒砂~シルト 鉄分沈着あり
- 12. 青灰色極砂流砂 鉄分沈着あり
- 13. 緑灰色シルト質極細粒砂
- 14. オリーブ灰色粘土質シルト
- 15. 青灰色粘土 下部はオリーブ色が強くなる
- 16. 灰色粘土
- 17. 灰色粘土 均質な堆積
- 18. 暗灰色粘土
- 19. 緑灰色粘土
- 20. 灰色粘土
- 21. 薄緑灰色粘土
- 22. 灰白色粘土

▼ Tr-2

- 1. 耕作土
- 2. 緑灰色シルト〜粘土 床土
- 3. 緑灰色極細粒砂
- 4. 褐灰色極細粒砂~細粒砂
- 5. 灰色極細粒砂 しまった粘質の堆積
- 6. にぶい黄褐色極細粒砂〜細粒砂 マンガン沈着する
- 7. にぶい黄褐色極細粒砂〜細粒砂
- 8. にぶい黄褐色極細粒砂
- 9. にぶい黄褐色極細粒砂~シルト マンガン沈着する
- 10. にぶい黄褐色極細粒砂
- 11. 褐灰色シルト~極細粒砂 しまった粘質の堆積
- 12. 灰色シルト質極細粒砂 鉄分沈着あり
- 13. 褐灰色シルト質粘土
- 14. 青灰色粘土 緑灰色 (~青灰色)極細粒砂~シルト
- 15. 暗灰色粘土~シルト 鉄分沈着あり
- 16. 粘土~シルト 緑斑濃い
- 17. 粘土~極細粒砂 緑斑薄い
- 18. 暗灰色シルト~極細粒砂 炭化物含む 包含層
- 19. 青灰色シルト~極細粒砂 炭化物含む 包含層
- 20. 暗灰色シルト〜粘土 炭化物含む
- 21. 青灰色シルト〜粘土

▶図29 柱状図1(1:40)

▼ Tr-3

- 1. 耕作十
- 2. 青灰色 床土
- 3. 灰白色極細粒砂~シルト
- 4. 褐灰色極細粒砂~シルト
- 5. 灰白色極細粒砂~シルト 上面に微量鉄分沈着あり
- 6. 灰白色極細粒砂~シルト 上面に微量鉄分沈着あり
- 7. 灰黄色極細粒砂~シルト 上面に微量鉄分沈着あり
- 8. 灰白色極細粒砂~シルト 上面にマンガン含む
- 9. 黄灰色極細粒砂~シルト 上面にマンガン含む 鉄分沈着あり
- 10. 褐色 マンガン含む
- 11. 灰白色シルト~極細粒砂 粘質
- 12. 褐色 マンガン含む
- 13. 灰白色 マンガン含む シルト〜極細粒砂 粘質
- 14. 灰褐色 マンガンなし シルト〜極細粒砂 粘質
- 15. 灰色極細粒砂~シルト マンガン少量含む
- 16. 青灰色粘土 中粒砂少量含む
- 17. 青灰色粘土 中粒砂多く含む 緑斑あり
- 18. 青灰色粘土 均質 粘質
- 19. 青灰色粘土 中粒砂少量混入 緑斑あり
- 20. 灰(~青灰)色シルト~極細粒砂 緑斑あり
- 21.灰(~青灰) 色シルト~極細粒砂 緑斑あり 包含層
- 22. 青灰色(~灰)色極細粒砂 遺物少量含む
- 23. 青灰色粘土 緑斑 包含層
- 24. 青灰色~オリーブ灰色粘土 緑斑 炭化物含む 包含層
- 25. 青灰色粘土 粗粒砂混入 粗い炭化物含む 包含層
- 26. 青灰色粘土 均質 炭化物含む 包含層
- 27. 暗灰色粘土 炭化物含む 包含層
- 28. 青灰色細粒砂~シルト 砂質 包含層
- 29. 灰色シルト 包含層
- 30. 灰色シルト
- 31. 暗灰色シルト

▼ Tr-4

- 1. 耕作土
- 2. 青灰色粘土
- 3. 黄灰色極細粒砂~シルト 4. 黄灰白色極細粒砂~シルト 鉄分沈着あり
- 5. 黄灰白色極細粒砂~シルト マンガン含む
- 6. 黄褐色極細粒砂~シルト 層理面上下にマンガン含む
- 7. 褐灰色極細粒砂~シルト 層理面上下にマンガン含む
- 8. 褐灰色極細粒砂~シルト
- 9. 灰白色粘土〜シルト 鉄分沈着あり マンガン少量
- 10. 灰白色シルト〜粘土
- 11. 褐灰色シルト〜粘土 極細粒砂少量含む
- 12. 褐色極細粒砂〜シルト
- 13. 青灰色シルト〜粘土
- 14. 青灰色シルト〜粘土 緑斑 包含層
- 15. 灰色粘土 包含層
- 16. 青灰色粘土 包含層
- 17. 暗灰色粘土

▼ Tr-5

- 1. 褐色極細粒砂 耕作土
- 2. 青灰色極細粒砂~シルト
- 3. 灰黄褐色極細粒砂~シルト
- 4. 灰褐色極細粒砂
- 5. 灰黄褐色極細粒砂~シルト
- 6. 灰褐色極細粒砂~シルト
- 7. 灰褐色シルト~極細粒砂
- 8. 灰褐色極細粒砂~シルト 9 青灰色極細流砂~シルト
- 10. 緑灰色 粘土~シルト
- 11. 灰色粘土~シルト
- 12. 灰白色粘土~シルト 緑斑あり
- 13. 青灰白色粘土~シルト 緑斑あり
- 14. 灰色粘土~シルト
- 15. 青灰色粘土~シルト

▼ Tr-6

- 1. 耕作十
- 2. 灰白色極細粒砂
- 3. 灰白色極細粒砂 均質 鉄分沈着あり
- 4. 褐灰色極細粒砂 マンガン含む 鉄分沈着あり
- 5. 灰白色極細粒砂 マンガン含む 鉄分沈着あり 堅緻にしまる
- 6. 黄白色極細粒砂 鉄分沈着あり
- 7. 褐灰色極細粒砂 マンガン含む
- 8. 黄灰色極細粒砂 マンガン含む 灰白色粘土混入
- 9. 青緑灰色極細粒砂~シルト 弱粘質
- 10. 灰色粘土~極細粒砂 緑斑あり 粘質
- 11. 灰白色~青灰色粘土 強粘質
- 12. 暗灰色粘土 微量土器片
- 13. 青灰色~灰色 緑斑あり 粘土
- 14. 暗灰色粘土 灰白色細礫あり

▼ Tr-7

- 1. 耕作土
- 2. 青灰色極細粒砂~シルト
- 3. 褐灰色極細粒砂~細粒砂
- 4. 灰色極細粒砂~細粒砂
- 5. 褐灰色極細粒砂~シルト 粘質 上部マンガン 鉄分沈着あり
- 6. 褐灰色極細粒砂~シルト 粘質 上部マンガン 鉄分沈着あり
- 7. 褐灰色極細粒砂~シルト 粘質 上部マンガン 鉄分沈着あり
- 8. 褐灰色シルト~極細粒砂 マンガン少量含む 粘質
- 9. 褐灰色粘土〜シルト
- 10. 青灰色粘土~極細粒砂 強い粘質
- 11. 青灰色粘土~シルト 強い粘質
- 12. 青灰色粘土~シルト 緑斑あり
- 13. 暗灰色極細粒砂~シルト
- 14. 青灰色粘土~シルト 緑斑あり
- 15. 青灰色粘土~シルト 包含層
- 16. 青灰色粘土~シルト 炭化物含む 微量細礫 包含層
- 17. 暗灰色粘土 均質な堆積

▼ Tr-8

- 1. 耕作土
- 2. 褐灰色極細粒砂
- 3. 灰色シルト
- 4. 褐灰色シルト 5. 青灰色極細粒砂~シルト
- 6. 灰オリーブ色シルト〜粘土 粘質
- 7. 緑灰オリーブ色極細粒砂 粘質
- 8. 青灰色シルト 均質かつ粘質な堆積
- 9. 灰色シルト〜粘土 緑斑あり 10. 青灰色シルト〜粘土 緑灰極細粒砂少量混入
- 11. 青灰色シルト 緑灰色極細粒砂多く混入
- 12. 暗灰色粘土 一部グライ化が進行して青灰色を呈する

▼ Tr-9

- 1. 耕作土
- 2. 青灰色極細粒砂~シルト
- 3. 灰白色極細粒砂~シルト
- 4. 褐色極細粒砂
- 5. 青灰色シルトに褐灰色極細粒砂が混入
- 6. 青灰色極細粒砂~シルト
- 7. 青灰色シルト〜粘土
- 8. 青灰色粘土~極細粒砂
- 9. 青灰色粘土~極細粒砂 緑斑多くみられる
- 10. 青灰色粘土~極細粒砂 緑斑少量含む
- 11. 暗灰色粘土~シルト
- 12. 灰色粘土~シルト
- 13. 青灰色粘土~シルト 炭化物含む
- 14. 青緑灰色粘土~シルト 包含層
- 15. 暗灰色粘土~シルト

なお、周辺は中筋川自然堤防付近の湿潤な地域であり掘削に伴う湧水が著しく掘削深度が増すにつれ壁面崩壊等の危険性が増すことから、作業の安全をはかるためほとんどのトレンチで地表面より3m以下は掘削を行えなかった。以下では、基本層序について記載したのち、遺物を確認したトレンチについてその概要を述べることとする。

基本層序 9つのトレンチを概観すると、いずれも耕土下約 $0.8m \sim 1.2m$ は褐灰色極細粒砂 (\sim シルト) の堆積が見られ、続いて青灰色~灰色のシルト (\sim 粘土)層が堆積する。褐灰色の粘質層は厚さ $5\sim 30cm$ ごとに細かな単位で堆積を繰り返しており、詳細に観察すれば相違点を指摘できるが、概ね類似した堆積である。層中にはマンガンや鉄分の沈着などが観察される。続くシルト (\sim 粘土)層は強い粘質を示し、グライ化し青灰色を呈している。この堆積についても小堆積ごとに区別できる。特にオリーブ色の斑文が見られる堆積の下層で遺物が出土する場合が多い。

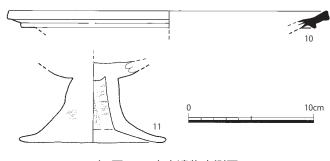
今回の調査では中筋川堤防に近い、Tr-2、3、4、7と県道下ノ加江線に近い Tr-9 で遺物を確認した。 遺物はいずれも古墳時代の所産と考えられ、既往の調査で確認されている中近世の遺構および遺物は 確認されなかった。

Tr-2 敷地内の東端に設定したトレンチである。地表下約 2.4m の箇所から弥生時代~古墳時代にかけての遺物が出土する。遺物包含層はグライ化した粘質の堆積で、層厚は約 40cm を測る。確認された遺物は少量で、包含層の遺物密度は低い。

Tr-3 建物建設予定地の南東に設定したトレンチである。地表下約 2.2 m の箇所と 3 m の箇所から遺物が確認された。遺物が確認されているのはいずれも青灰色を呈する粘質のシルト層で、地表下 2.2 m ~ 3.2 m までの間は炭化物や植物遺体が認められる。地表下 3.2 m の地点からは古墳時代の所産と考えら

れる土器片が出土する。包含層から出土する遺物の時期は古墳時代に比定される。

Tr-4 敷地内の南西端に位置するトレンチである。このトレンチが中筋川の堤防にもっとも近接する。地表下約1.9m~2.7mまでの間で弥生時代~古墳時代の遺物が出土する。出土量は今回の調査で最も多く、包含層も明確である。10は須恵器甕



▶ 図 31 出土遺物実測図

口縁部である。復元される口縁径は約25cm ほどで、端部直下に鋭利な稜をもつ断面三角形の凸線がめぐらされている。11 は土師器高坏脚部である。裾部で屈曲し外方へ伸び、端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整で仕上げられている。

Tr-7 建物建設予定地の南西隅付近に設定したトレンチである。地表下約 $3 \sim 3.2 \text{m}$ の層位から遺物が 出土する。遺物を含む層位は青灰色のシルト (\sim 粘土)で強い粘質を呈している。出土する遺物は古墳 時代のものと考えられる。

Tr-9 県道下ノ加江線に近い地点に設定したトレンチである。自然堤防からは最も遠く、地形的に最

も低い地点である。地表面より 3m の箇所で遺物を確認している。遺物の時期は古墳時代に比定される。当該地点は県道下ノ加江線工事の折に県教育委員会によって発掘調査が行われ、当該期を含む遺構・遺物が確認されていることから同一の広がりであろうと考えられる。

▼まとめ

今回の調査では設定した9つのトレンチのうち5箇所で埋蔵文化財の存在を確認した。遺構については今回の調査で検出し得てはいないが、調査範囲の南半で明確な包含層を確認することができた。包含層については分布に粗密はあるものの地表面から2m~3m付近までの間で弥生時代~古墳時代の所産と考えられる遺物が出土する。

全体的な傾向としては中筋川堤防に近づくにつれて出土する遺物の量が増加する傾向が認められ、 県道下ノ加江線付近でもやや出土量が増えることが指摘できる。

なお、既往の調査で明らかなように具同中山遺跡群内の中筋川堤防よりでは古墳時代の祭祀に伴って比較的小範囲に遺物が密集する状況を示す場合が多い。すなわち、今回トレンチを設定していない 箇所に遺物・遺構が濃密に存在する可能性も十分考えられるのであり、周辺の開発には十分な注意が 払われる必要がある。

具同中山遺跡群 (2002014)

所 在 地 具同字北ミソデン 2915 - 1 他

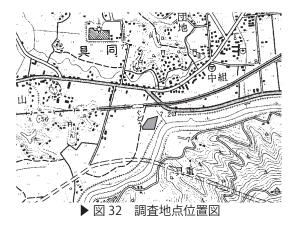
調査期間 2003.3.4 ~ 2003.3.120

調査原因 民間開発

調査面積 80 ㎡ (5,178 ㎡)

時 代 弥生時代、古墳時代、古代、中近世

調查種別 試掘確認調查



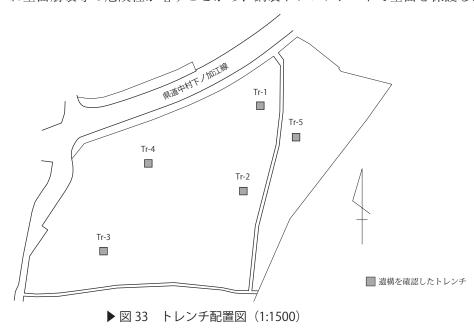
▼ 調査の経過

四万十市具同字北ミソデン 2915-1 外の地権者 11 名

は当該地にて店舗新設を計画した。当該地は埋蔵文化財包蔵地として周知されている具同中山遺跡群の範疇にあるため、事前に地権者および施工業者より市教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の取扱いについての照会があった。これを受けて三者で協議を重ね、事業者となる地権者一同の協力で試掘確認調査を行うはこびとなった。

▼ 調査の概要

調査は、敷地内における埋蔵文化財の残存状況が把握できるよう 4m 四方もしくは 5m 四方程の 5 つのトレンチを設定して実施した。機械掘削には油圧ショベル PC-200 を使用し、トレンチ内の層序確認や遺物の取上げ等を人力にて行った。トレンチ掘削後、写真撮影及び土層断面の実測を行い、トレンチを埋め戻した。なお、周辺は中筋川自然堤防付近の湿潤な地域であり掘削に伴う湧水が著しく掘削深度が増すにつれ壁面崩壊等の危険性が増すことから、鋼製トレンチシートで壁面を保護したが、



なお安全をきすためほとんどのトレンチで地表面より3m以下はトレンチ内での作業を行えなかった。

今回の調査では、すべてのトレンチで地表下約50cm以下より埋蔵文化財の存在を確認した。埋蔵文化財は、複数の時代にわたって地表下約3m下まで途切れることなく連続して確認されており、各期の遺構面も3~4面ほど識別することができる。以下では基本的な層序を記述したのち、各トレンチごとに出土した遺構・遺物について記述し、当調査の報告とする。なお、柱状図に記す層位名はトレンチごとに個別に呼称するもので、遺構名についてもトレンチ単位で付している。

基本層序 各トレンチを概観すると、いずれも耕土下約 $0.8m \sim 1.2m$ は褐灰色極細粒砂 $(\sim \nu)$ の堆積が見られ、続いて青灰色~灰色のシルト $(\sim k)$ 層が堆積する。褐灰色の粘質層は厚さ $5\sim k$ 30cm ごとに細かな単位で堆積を繰り返しており、数層に区別が可能である。層中にはマンガンや鉄分の沈着などが観察される。続くシルト $(\sim k)$ 層は強い粘質を示し、還元作用によって灰色を呈す層位とグライ化して青灰色を呈する層位が互層に堆積する。青灰色シルト層はいずれのトレンチでもほぼ同じ高さで確認されており、大きな変化は看取されない。

埋蔵文化財の残存状況は、褐灰色極細粒砂(~シルト)層から古代及び中近世の遺物が、青灰色~灰色のシルト(~粘土)層からは古墳時代及び弥生時代の所産と考えられる遺物が出土する。

褐灰色極細粒砂 (\sim シルト) 層中では、 $T.P.+5.7m \sim 6.4m$ 付近までは近世期の遺物が出土し、以下で古代の包含層が確認される。中世期に属すると思われる遺物が採取されることもあるが、少量である。

青灰色シルト層では $T.P.+4.5m \sim 5 m$ 付近を中心に古墳時代の遺物が出土する。トレンチによっては T.P.+5 m 以下で弥生時代の所産と思われる土器細片を確認できるが、少量で分布に疎密がある。

Tr-1 調査対象地内の北東端に設定したトレンチである。Tr-1 については耕土直下で近世の所産と考えられる焼土が確認された。焼土の分布は ϕ 60cm ほどの円形をなしており、内部は赤褐色の極細粒砂が堆積する。焼土の検出状況等から野鍛冶等の痕跡ではないかと考えられる。焼土近くから 2 点の近世陶磁器破片が出土している (14・16)。

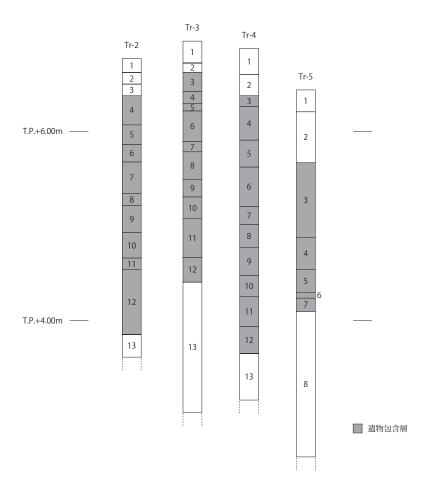
当該トレンチの調査については、事業者との調整をおこなった結果、十分に保護層を確保し遺構面 に影響を与えない深度で工事をすすめることとし、検出状況の撮影のみを行って埋め戻した。

したがって、Tr-1 については下位の層序については調査を行っていない。しかし、Tr-1 が面している県道下ノ加江線は敷設時に高知県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われており、弥生時代から中近世にかけての遺構・遺物が多数確認されている。今回の検出面の状況と既往の調査成果とを照らすかぎり連続した広がりがあるものと想定される。

Tr-2 調査対象地内で建築物設置予定範囲の北東隅に設定したトレンチである。地表下約 50cm の箇所から遺物が出土し始め、地表下 3m まで連続して各期の遺構・遺物が確認される。

遺物は4層~8層までは近世を主とする遺物が、9層~11層までは古墳時代の遺物が出土する。なお、12層からは粗粒砂を多く踏む暗灰色の土器片が数点出土している。いずれも細片で器面は著しく摩滅しており、器種の特定には至らないが、弥生時代の在地産土器の胎土に酷似することから当該時期の所産と考えられる。

遺構の残存状態は非常に良好で、柱穴を5基、土坑を1基確認した。出土遺物から近世期と古墳時



▼ Tr-2

- 1. 耕作土
- 2. 灰白色極細粒砂に褐灰色極細粒砂含む
- 3. 灰白色極細粒砂やや黄色
- 4. 褐灰色極細粒砂 (~シルト) 包含層 弱い粘質の堆積
- 5. 明褐色極細粒砂に灰白色極細粒が混入
- 6. 暗褐灰橙色 極細粒砂
- 7. 明褐色極細粒砂~シルト
- 8. 暗褐色極細粒砂~シルト 粘質の堆積
- 9. 明褐色(~青灰色)極細粒砂 砂質でグライ化が進む
- 10. 青灰色シルト〜粘土砂質でややグライ化の進む粘質の堆積
- 11. 青灰色砂質極細粒砂
- 12. 青緑灰色極細粒砂 砂質
- 13. 暗灰色中粒砂~シルト質の極細粒砂 均質にしまった堆積

▼ Tr-3

- 1. 耕作土
- 2. 青灰色極細粒砂
- 3. 青灰白色 下部層極細粒砂
- 4. 褐灰色+マンガン含む 極細粒砂
- 5. 褐灰色極細粒砂
- 6. 明褐色極細粒砂
- 7. 褐灰色マンガン含む
- 8. 褐色 しまる 遺物多
- 9. 褐灰色~オリーブ色極細粒砂 古墳?
- 10. オリーブ色~青褐色極細粒砂
- 11. 均質かつ強い粘質
- 12. 青灰色極細粒砂混入 やや砂質
- 13. 青灰色極細粒砂〜粗粒砂 砂質 硬くしまる

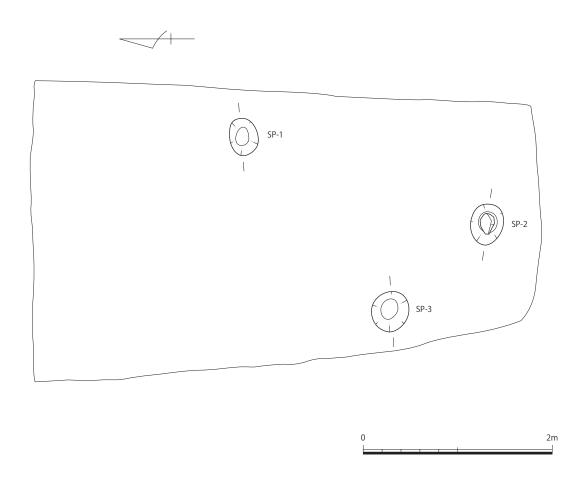
▼ Tr-4

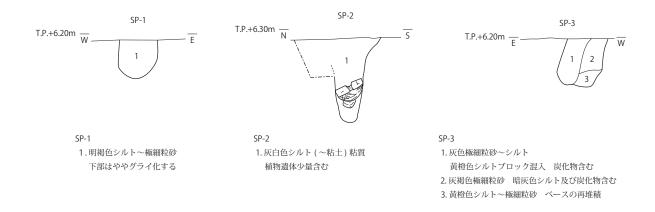
- 1. 耕作土
- 2. 黄灰色極細粒砂
- 3. 灰褐色極細粒砂 弱い粘質を呈する
- 4. 明褐色極細粒砂〜シルト 堅緻な堆積で灰色シルトプロック 少量混入
- 5. 暗褐色極細粒砂〜シルト
- 6. 明褐色極細粒砂~シルト 堅緻にしまる 4層に類似する
- 7. 青灰色極細粒砂~シルト グライ化が進む
- 8. 灰色 (~青灰色) 粘土 強い粘質を呈する
- 9. 青灰色粘土~極細粒砂 やや砂質を呈する。
- 10. 青灰(~灰)色極細粒砂~粘土
- 11. 青緑灰色極細粒砂 硬くしまった砂層
- 12. 青緑灰(〜灰)色極細粒砂に灰色粘土が少量混入
- 13. 灰色粘土 炭化物含む

▼ Tr-5

- 1. 耕作土
- 2. 黄褐色極細粒砂 砂質
- 3. 明褐色極細粒砂に灰色シルトブロックが少量混入する
- 4. 褐灰色極細粒砂~シルト 弱い粘質の堆積
- 5. 上部グライ還元層 シルト粘質
- 6. 弱グライ 青灰色 粘質
- 7. 灰色シルト〜極細粒砂 砂質しまる
- 8. 青灰色シルト砂質

▶図34 柱状図(1:40)





▶ 図 35 Tr-2 5 層上面遺構平面図(1:40)

代の2時期に大別できるものと考えられる。

5層上面で確認した遺構は図35に示す3基の柱穴である。SP-2は検出時の直径約40cm、深さ約8cmが残存し、底部からは石臼破損品(91)が出土した。91は石臼の半分が欠損し半円形になったもので、斜めになった状態で柱穴の最下部に配されていた。91下にもこぶし大の円礫が配されていること、柱の抜き取り痕が認められないこと等を勘案すると、欠損した石臼を礎石もしくは根固めとして転用したものと考えられる。

6層上面では柱穴1基と土坑1基を確認している。土坑は深さ10cm 程度の浅い遺構で幅約1.1m、 長さ約2.5mを測り、不定形の広がりを見せる。柱穴は長軸40cmほどの楕円形をなす。

10層上面では古墳時代の遺物とともに柱穴1基を確認した。上層の遺構と違い、埋土は青灰色シルトが堆積する。

遺物は $4 \sim 5$ 層より染付皿 (13)、青磁碗 (15) の破片が出土する。いずれも細片である。10 層、11 層より台付鉢 (39)、壺口縁部 (52) が出土する。39 は台接合部外面に指頭圧痕が顕著に残る。

Tr-3 建物建設予定地の南西に設定したトレンチである。地表下約 40cm の箇所から中近世の遺物が出土し始め、地表下 2.5m にかけて遺物・遺構が出土する。遺構の残存状態は良好で、合計柱穴 7 基、溝1 基、土壙1 基を確認した。遺構検出面は 6 層上面、9 層上面、13 層上面である。

出土遺物は古墳時代に属するもの、古代に属するものが主体となり、少量ながら近世の遺物が出土する。3層~7層にかけては概ね近世期の遺物が出土し、8層では古代の遺物が多く出土する。また、10層~12層には古墳時代の遺物が含まれる。

6 層上面では柱穴 3 基と溝 1 条を検出した (図 36)。

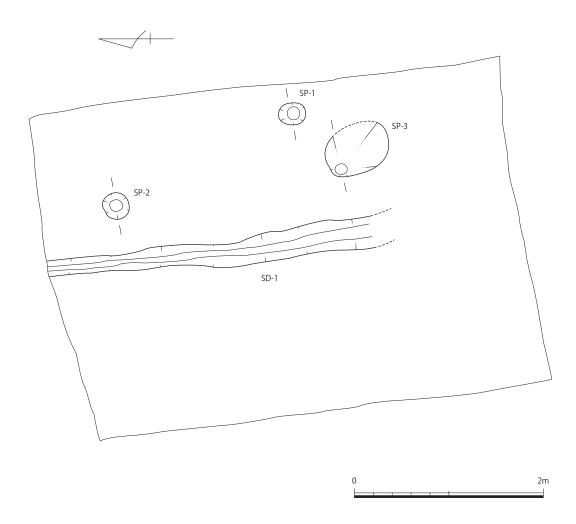
SD-1 は、幅約 30cm、残存する深さは 10cm にみたない浅い溝で南北方向へ直線的に伸びているが、南壁に達する前に消滅する。

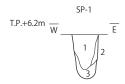
SP-1 ~ 3 は深さ 30 ~ 50cm の柱穴で、埋土最下層にはグライ化したシルトが堆積する。とくに SP-2 からは柱材の一部が、SP-3 からは礎板と考えられる板材と、その下から肥前産染付皿 (12) が出土している。12 は 17 世紀後半頃の所産と考えられる。

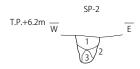
SK-1 は、9 層掘削時に壁面で発見し、調査区を拡張して調査した土壙である。このため平面図は図 37 に記載されているが、堆積状況をみる限り本来 6 層で検出されるべき遺構である。直径 80 \sim 90cm ほどの楕円形のプランを持ち、底面より 20cm 程上方に木製の桶底部が残存する。桶は直径 60cm を測る円形の底板と、それにつながる側板の一部が確認された。板材の大半は腐食して失われており、桶の高さ等を復元することは難しい。この木製桶は、近世期に用いられる簡易的な棺桶 (早桶) であろうと想定される。

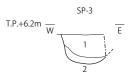
SD-1 および他の柱穴との位置関係に着目すれば、SK-1 と柱穴は SD-1 によって区分されていることがわかる。SK-1 が墓壙であるとすれば、SD-1 は墓域を区画する意味合いをもつものと考えることもできる。

9層上面では SP-4、SP-5、SP-6 の 3 基の柱穴を確認した (図 37)。 いずれも直径 20cm ~ 30 cm ほどをはかり、ややグライ化する暗褐色~暗青灰色の埋土が堆積する。









SP-1

- 1. 褐灰色シルト〜粘土
- 2. 黄褐灰色極細粒砂~シルト
- 3. 青灰色シルト (~粘土) 粘土

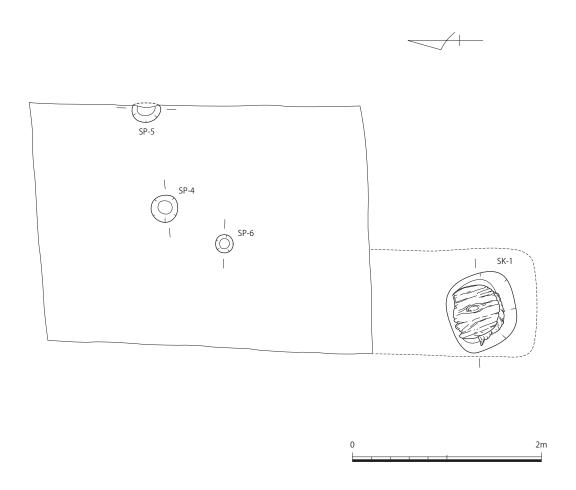
SP-2

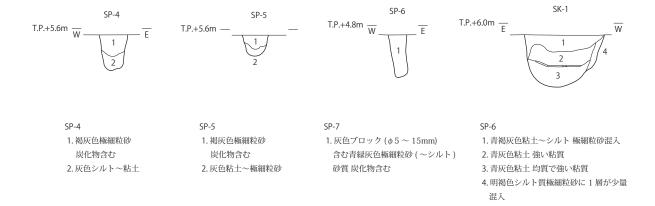
- 1. 褐灰色シルト〜粘土
- 2. 黄褐灰色極細粒砂~シルト
- 3. 青灰色シルト (〜粘土) 粘土 柱材が残存する

SP-3

- 1. 褐灰色シルト〜粘土
- 2. 青灰色シルト (~粘土) 粘土

▶ 図 36 Tr-3 6 層上面遺構平面図 (1:40)





▶ 図 37 Tr-3 9 層上面遺構平面図(1:40)

13 層上面では柱穴を 1 基確認した。直径 20cm ほどの小型の柱穴で、暗灰色の埋土が堆積する。 本トレンチで出土した遺物は、土師器坏 (21・22)、土師皿 (23・24)、羽釜 (26・27)、竃 (28)、長胴甕 (43)、土錘 (55)、甕 (47)、手づくね土器 (48) である。

21 は坏で、底部の約 1/3 が残存し、底径 7.2cm を測る。器面は摩耗し調整は不明であるが、底部の切り離しにはヘラ切りによる。22 は乳白色の胎土で、底部の約 1/3 が残存し、輪高台がつく。23、24 は小型の皿で、底部が残存する。底部の切り離しはヘラ切りによる。26、27 は羽釜口縁部である。直立ぎみに立ち上がる口縁部下に幅の狭い鍔が貼付けられている。胎土には砂粒が多く混入し、口縁部内外面にはヨコナデ、胴部外面には縦方向のハケメが見られる。これらの特徴は摂津及び四国、播磨地方に分布する、いわゆる摂津 C 型羽釜の特徴と一致する。26、27 は非常に類似した形状をなしており、同一個体である可能性もある。28 は移動式竃である。焚き口上部のみが残存する。焚き口側の端部はやや外側へ外反しつつ平坦に仕上げ、直立気味に立ち上がって上端はナデで平坦に仕上げている。庇は欠損しており、接合部のみが判別できる。43 は長胴甕である。口頸部の破片で、復元口径 27.2cmを測る。口縁部内面は強いヨコナデで端部は尖り気味に仕上げられており、外面はタテハケ調整後にヨコナデ調整、胴部内面はナデ調整を施す。胎土には 3mm 以下の砂粒を多く含み、金雲母、長石等の鉱物を含む。色調は内面が褐色、外面が灰褐色を呈する。43 はいわゆる甕 K 形態の特徴を有しており、胎土等の観察から摂津地方からの搬入品と考えられる。この他に土錘 (55) が 1 点出土する。

以上の遺物はすべて 8 層から出土したものであり、当該包含層からは 10 世紀を中心とした遺物が出土している ことが分かる。

このほか、11 層から出土している遺物が甕 (47) と手づくね土器 (48) である。47 は復元口縁径 22.8cm を測り、内外面はナデで仕上げる。内側に顕著に粘土帯の継ぎ目が見られ、指頭圧痕が見られる。48 は周辺の祭祀関連遺構において頻出する手づくね土器である。復元径 6.9cm、高さ 6.1cm を測る。いずれも古墳時代の所産と考えられる。

Tr-4 敷地内の中央部の北側に位置するトレンチである。遺構・遺物共に最も出土量の多いトレンチである。地表下約50cmの箇所から中近世の遺物が出土し始め、地表下3.1mにかけて遺構・遺物が出土する。遺構は4層上面、5層上面、9層上面で確認しており、出土遺物から中世に属するものと古墳時代に属するものが存在する。

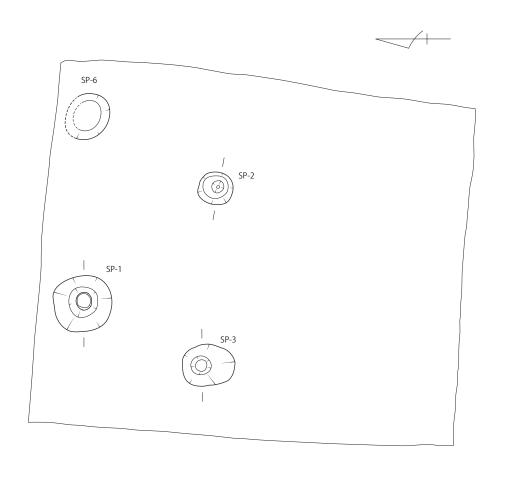
検出した遺構は、柱穴20基と土坑1基、古墳時代の土器群等が挙げられる。

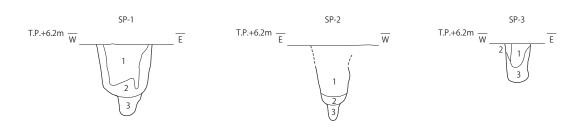
古墳時代の層位からは既往の調査でも知られる祭祀関連遺構の遺物出土状況に類似した密度の高い土 器群を確認した。

遺物は $3\sim6$ 層より東播系須恵器 $(17\cdot18)$ 、土師皿 (30)、土錘が出土し、 $7\sim9$ 層からは古墳時代の所産と考えられる椀 $(33\sim37)$ 、甑 (38)、高坏 $(40\sim42)$ 、甕 $(44\sim46\cdot53\cdot54)$ 、壺 $(50\cdot51)$ 、土錘が出土する。

当該トレンチの特徴として、土錘が大量に出土することが挙げられる。特に $3 \sim 6$ 層中では同形の 17 個の土錘が確認されている。

SK-1 はトレンチの北隅で確認した円形の土坑である。調査区外へプランが伸びており、全体の形状





SP-1

- 1. 褐灰色極細粒砂 (~シルト) 弱い粘質 鉄分沈着
- 2. 灰色シルト (〜粘土) 粘質 1 層がわずかに混入する
- 3. 青灰色粘土~シルト 強い粘質 鉄分多く沈着し硬化する

SP-2

- 1. 灰褐色粘質土 シルト質極細 粒砂 炭化物・植物遺体含む
- 2. 褐色極細粒砂~中粒砂 1層が混入 堅緻な砂質層
- 3. 青灰色粘土

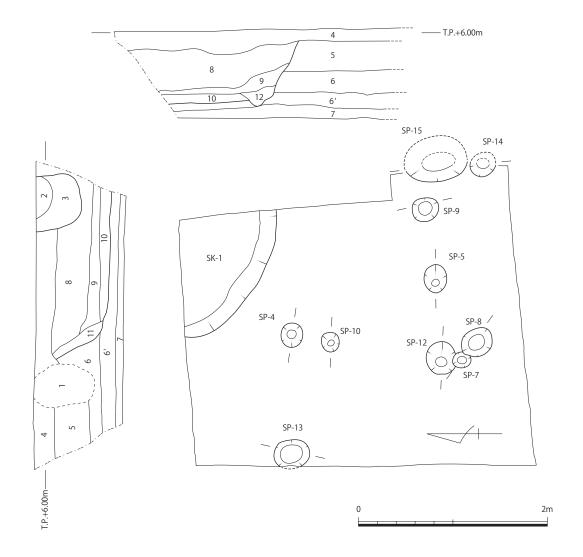
SP-3

1. 褐灰色極細粒砂〜シルト 弱い粘質

2m

- 2. 灰色粘土質シルト
- 3. 灰色極細粒砂~粘土

▶ 図 38 Tr-4 4 層上面遺構平面図(1:40)

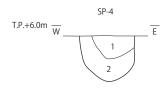


- 1. 撹乱
- 2. 褐灰色極細粒砂(SP-6 埋土)
- 3. 褐灰色極細粒砂~シルト 下部でグライ化する (SP-6 埋土)
- 4. 明褐色極細粒砂〜シルト 堅緻な堆積で灰色シルトブロック 少量混入(柱状図 4 層と同一)
- 5. 暗褐色極細粒砂~シルト (柱状図 5 層と同一)
- 6.明褐色極細粒砂〜シルト 堅緻にしまる 4層に類似する (柱状図6層と同一)
- 6′. 褐灰色極細粒砂~シルト 堅緻にしまる
- 7. 青灰色極細粒砂〜シルト グライ化が進む (柱状図 7 層と同一)

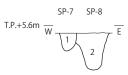
SK-1

- 8. 暗褐色極細粒砂 強い粘質を呈する
- 9. 褐色極細粒砂に青灰色粘土~シルトが混入する
- 10. 暗オリーブ灰色極細粒砂~シルトに褐色極細粒砂が少量混入
- 11. 暗褐灰色極細粒砂
- 12. 暗灰色シルト~極細粒砂

▶ 図 39 Tr-4 7 層上面遺構平面図(1:40)



SP-5 T.P.+5.6m —



SP-4

- 1. 褐灰色極細粒砂 マンガン含む 砂質層
- 2. 灰色粘土~極細粒砂

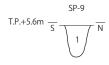
下部は粘土~シルトが多く混入する

SP-5

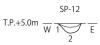
- 1. 褐灰色極細粒砂〜シルト 炭化物有 弱粘質
- 2. 明褐色極細粒砂 しまった 粘質土 ベースに似る 柱痕

SP-7

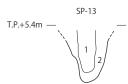
- 1. 褐灰色極細粒砂~シルト ベースブロック混入 強い粘質の堆積
- 2. 褐灰色極細粒砂〜シルト ベースブロック混入 強い粘質の堆積

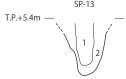






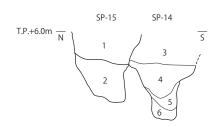
- 1. 褐灰色極細粒砂~シルト ベースブロック混入 炭化物を含み粘質
- 1. 褐灰色極細粒砂~シルト 灰色シルト〜粘土が混入する 炭化物を含み粘質。
- SP-12
- 1. 灰色粘土 炭化物・遺物含む
- 2. 青灰色シルト質粘土 黄斑有





SP-13

- 1. 黄橙色極細粒砂~シルト 炭化物含む
- 2. 灰褐色シルト~極細粒砂 下部はグライ化が進み青灰色



- 1. 暗褐色極細粒砂~シルト 炭化物含む
- ベースブロック少量混入 2. 褐色極細粒砂〜シルト
- ベースブロック含む

SP-15

- 3. 暗褐色極細粒砂~シルト 炭化物含む
- 4. 褐色極細粒砂〜シルト ベースブロック含む
- 5. 灰褐色極細粒砂~シルト
- 6. 青灰色極細粒砂~シルト 炭化物含む

▶ 図 40 Tr-4 柱穴断面図 (1:40)

はあきらかでないが、直径およそ 1m 程を測るものと想定される。SK-1 は 6 層掘削時に明確なプランを確認した遺構であるが、壁面の堆積状況をみるかぎり、本来 5 層上面で検出すべき遺構であり、他の 7 層上面で検出した柱穴に比してやや新しい時期の遺構と考えられる。埋土中より炭化物等のほか、土錘 $(75\cdot76)$ 、土師器皿 (30) が出土する。30 は、個体の 1/4 程が残存する土師皿で、底部に糸切り痕が認められる。 $14\sim15$ 世紀頃の所産と考えられる。

この他に当該トレンチにおいては10基の柱穴を確認している。深さを増すにつれ調査面積が狭小になるため、遺構間の関係を明らかにすることは難しいが、遺構密度は高いものと言える。

 $7 \sim 9$ 層では柱穴 5 基を確認した。いずれも青灰色シルト層をベースとし、炭化物を多く含む暗灰色シルトを埋土とする。直径は概ね 20cm 程をはかり、深さは、30cm ~ 50 cm ほど残存する。

 $17 \cdot 18$ は捏鉢口縁端部である。17 は端部を肥厚させるが拡張は明瞭でなく、18 は端部を上方へ拡張する。

33~37 は底部が丸底で口縁部がやや内湾する椀である。38 は甑である。底部に穿孔をもち、内湾 ぎみに立ち上がる。器壁は厚く胎土に2~ 3mm の細礫を多く含む。40・41 は高坏脚部である。脚部 下方で屈曲し裾部は直線的に伸びる。42 は坏部がゆるく外反する。44 ~ 46・53・54 は甕である。44 は頸部から口縁にむかって緩やかに外反し、内外面はナデ調整を施す。45・49は体部と頸部の間で屈 曲し、直線的に口縁端部へ伸びる。口縁部は内外面ともナデ調整で仕上げ、頸部内面に指頭圧痕が見 られる。46 は頸部から口縁端部にむかって緩く外反する。内外面ともナデ調整で仕上げている。51 は 小型の直口壺である。口縁はやや外側に開きつつ直線的に立ちあがる。52も同様の壺であると思われ るが、頸部は口縁にむかって外反ぎみに立ち上がる。土錘は Tr-4 内で合計 24 点出土している。出土 する包含層には明らかな時期差が認められるが、いずれもほぼ同じサイズ、形状をなしている。これ は当該地点における漁労のあり方が長期的に大きな変質をしていないことを物語るものと考えられる。 Tr-5 建物建設予定地の東隣に位置するトレンチである。現地表面から約70cm 下方より遺物の出土が 確認される。Tr-1~4と異なりやや褐灰色の極細粒砂層が厚く堆積し、遺構は判別しづらい。2~4 層付近までは中世の遺物が、それ以下では古墳時代の遺物が確認される。古墳時代の層位には炭化物 などがまとまって出土するなどの痕跡も認められ、周辺に遺構の存在する可能性が高い。地表下 2.2m 付近で遺物・遺構の出土は見られなくなり、自然堆積が続く。他のトレンチと比べて様相がやや異な るのは、中筋川堤防に最も近接する地点であるためであろうかと考えられる。

4層上面では不定形の落ちを 1 基確認した。SX-1 は、残存する深さは $10 \sim 15 \text{cm}$ ほどで、プランは 明確でなく調査区外へ伸びる落ちである。

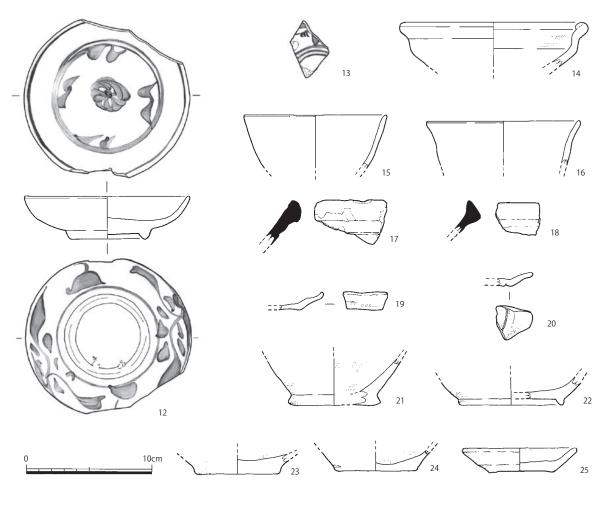
SX-1 からは土師皿 (25)、坏 (31)、瓦器椀 (32) が出土する。25 は土師器皿である。小型のもので、直径は約 8.8cm、器高 1.9cm を測る。内面にタールの付着がみとめられ、灯明皿として使用されていたものと想定される。31 は土師器坏である。平底で口縁部にむかって直線的に立ち上がる。32 は瓦器椀である。底部は平底で内湾気味に立ち上がり口縁端部はやや外反気味に終わる。器壁は厚く、焼成は不良である。

▼まとめ

今回の調査では設定したトレンチのすべてで埋蔵文化財の存在を確認した。遺構・遺物の残存状態は非常に良好といえる。Tr-5を除くいずれのトレンチにおいても狭小な面積のなかで複数の遺構が確認されていることからも周辺での遺構の密度は高いものと考えられる。

中近世の遺構・遺物については、中国産貿易陶磁器や北九州地方からの搬入陶磁器などの出土、礎板や礎石をもつ柱穴の存在など、中筋川を媒体とした流通に関わる遺跡の展開を想定させる成果を得た。すでに県道下ノ加江線工事に伴う発掘調査でも確認されている掘建柱建物とも関係し、比較的広範囲に建物群が残存しているものと期待される。

また、Tr-3のSK-1のように近世の墓制に関わる資料も市内初の出土であり、当市を含めた県西南部の墓制を考えるうえで重要である。早桶とは埋葬時に使用された木製桶のことで、一般的には死者が生じた際に急ごしらえでつくる棺桶をいう。この早桶は大分県下においては17世紀後半代には出現していることが知られている。SK-1付近の柱穴からは17世紀後半頃の肥前産陶磁器(12)が出土するなど九州地方との密接なつながりもうかがえる。また、12は柱穴の礎板下から出土しているもので、当該器種が地鎮等の祭祀行為に用いられた可能性も示唆される。



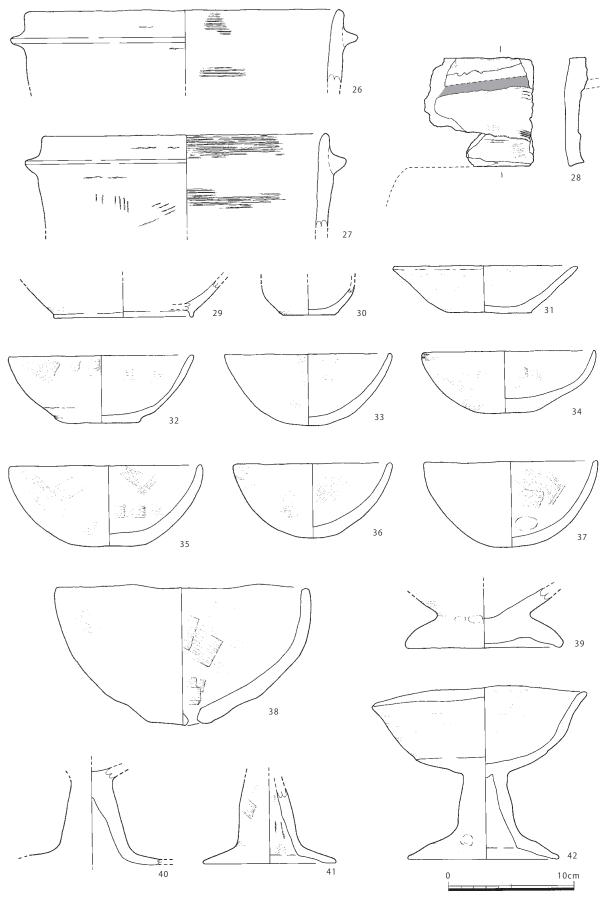
▶ 図 41 出土遺物実測図 1

古代の遺構は数量的には少ないが、多くの遺物を確認している。なかでも煮炊具については、竃、羽釜、甕など一揃えが出土しており、当該遺跡での生活に伴う土器組成を考える良好な資料となろう。加えて、これら煮炊具のなかには羽釜(26・27)、甕(43)等摂津地方の影響を受けたと思われるもの、もしくは搬入品が含まれており、生活雑器における器種構成にも他地域の影響が色濃く反映されていることが分かる。

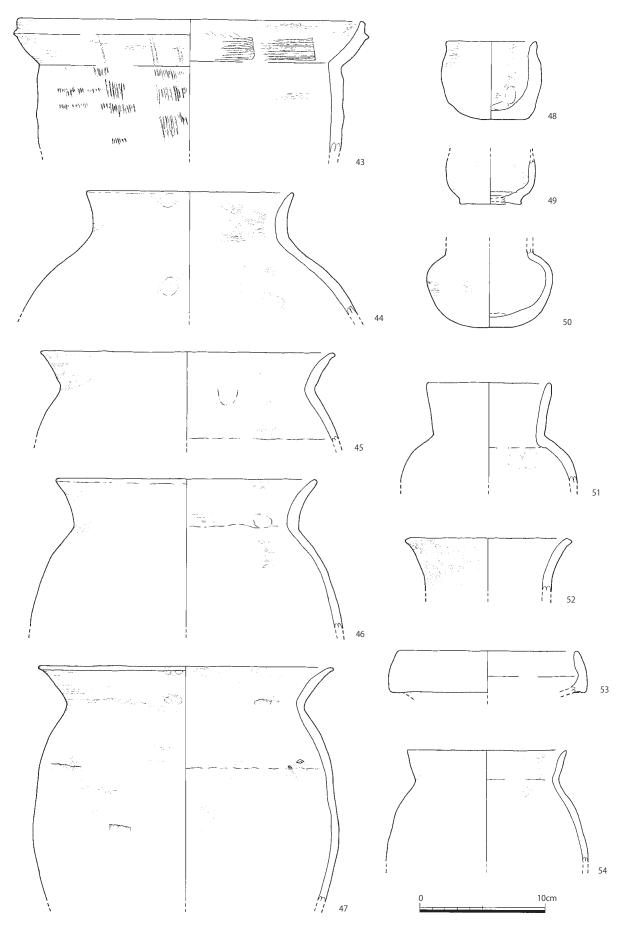
古墳時代の遺構は柱穴と祭祀関連遺構と考えられる土器群が確認されている。当該時期の調査時にはすでに法面に押され調査区はきわめて狭小な範囲となっているため、多くの遺構を確認し得てはないが、良好な包含層が確認されているため周囲に遺構を伴う集落址が広がる可能性がある。

なお、弥生時代の遺物を確認したのは Tr-2 と Tr-4 のみであり、いずれも良好な遺物は含まれない。 残存状況には疎密が認められるものの、調査面積の制限等を勘案すると今後も十分な注意が払われる 必要があろう。

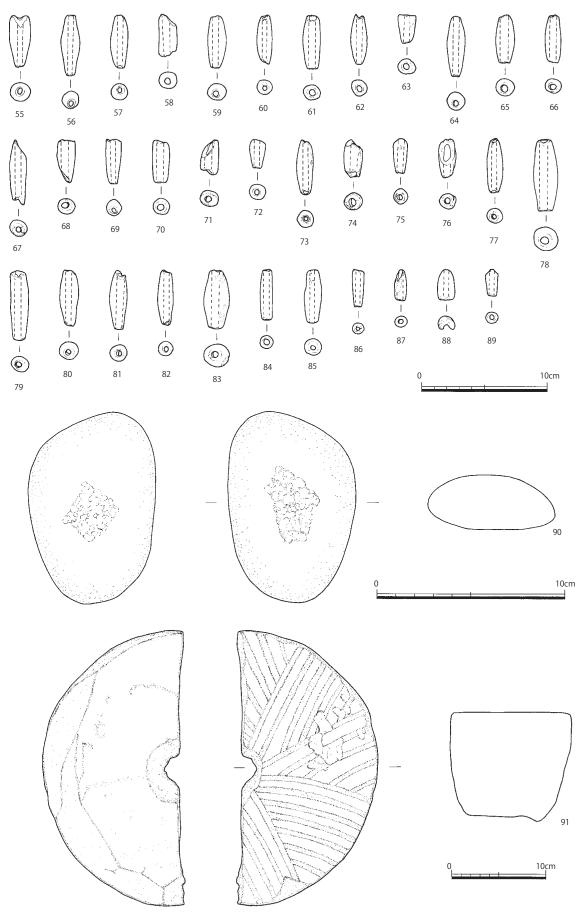
以上のように、当該地点の埋蔵文化財の残存状態は非常に良好で、また検出される深度も浅い。遺構・遺物の量およびその性格からも文化財保護上特に注意が必要な地点である。



▶図42 出土遺物実測図2



▶図43 出土遺物実測図3



▶図44 出土遺物実測図4

九樹城跡 (2002015)

所 在 地 九樹字古城山 1370 番地 他

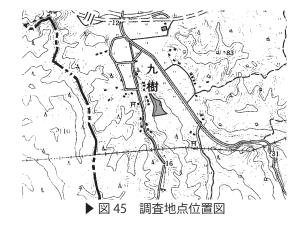
調査期間 2003.6.10 ~ 2003.7.4

調査原因 墓地造成

調査面積 15 ㎡ (1,575 ㎡)

時 代 中世~近世

調查種別 試掘確認調查

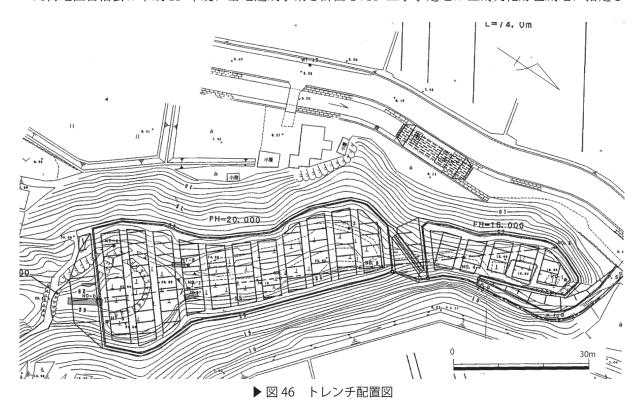


▼ 遺跡の概要

九樹遺跡は中世期の山城である。九樹集落を中筋川に向かって北流する九樹川とツルバ川で囲われた独立丘陵上に位置し、両河川は自然地形による堀の役割を果たしている。丘陵頂上部は古城山という字名が称するとおり、明確な堀切が確認されており、九樹城跡の主体的な場所であったことがわかる。これに比べて丘陵下部の北突端部分(今回の工事予定地)には平坦面は随所に存在するものの、旧来より地元の墓地として利用されており、墓穴掘削による撹乱と墓地造成用の切土などによる撹乱が進行し、明確な遺構は地表面からは観察できない。

▼ 調査の経過

九樹地区自治会は平成15年度に墓地造成事業を計画した。工事予定地は埋蔵文化財包蔵地に指定さ



52

れる九樹城跡を含んでおり、当該工事に先立って、遺跡の有無及び内容・性格・範囲等を把握し、本 発掘調査の要否等、埋蔵文化財保護上の取り扱いについて検討する必要が生じた。これを受けて平成 13年6月10日から現地で試掘確認調査を実施するはこびとなった。

▼ 調査の概要

調査対象地内で、現状地形の観察から遺構の残存する可能性の高い箇所にトレンチを4箇所設定し、人力にて表土層を除去したのち、遺構・遺物の発見に努めた。丘陵東側斜面はほぼ垂直に近い角度で裾部へ落ちるが、東側斜面に比べて西側斜面は傾斜が緩く堀切等の遺構が存在する可能性があったため、西側斜面の下草を除去し遺構の有無を確認した。以下では基本的な層序を確認した後、トレンチごとの様相を概観することとする。

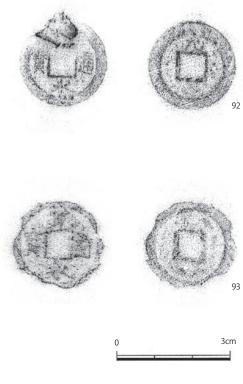
基本層序 表土層約50 cm を除去すると基盤層が確認される。人為的な痕跡が認められるのはこの基盤層上であろうと考えられた。基盤層は丘陵を形成する黄灰色極細粒砂で、角礫・亜角礫を含む。

Tr-1 工事予定地内で最も高所に位置するトレンチである。地表面からの観察では墓石のある平坦面と比して溝状の凹みが認められた。この溝状の落ちに直行するようにトレンチは設定されている。この溝状の凹みが堀切であった場合、丘陵斜面部にも堀切が存在すると考えられるため対応する丘陵の西斜面に Tr-2 を設定した。しかし、Tr-1 にて表土 (約50 cm)を除去するとベース面は比較的平坦でおおきな地形の変化はなく、人為的な痕跡は認められない。なお、平坦部周辺は土を盛り上げて、高さ約30~50cm ほどの土塁状の高まりをなしている。これらも九樹城に関連するものかと考えられたが、

墓地作成時の整地作業によるものとの区別が困難である。なお、Tr-1を設定した平坦部に登るにはS字状に屈曲する通路を通らねばならず、これらの小道は小口である可能性も否定できない

Tr-2 Tr-1 の西側斜面に設定したトレンチである。斜面自体は急で表土層の堆積はほとんどない。上述したように Tr-1 内で確認されると思われた堀切に対応するべく設定していたが、Tr-1 同様人為的な痕跡は認められない。

Tr-3 九樹丘陵の西側に設定したトレンチである。丘陵の形状が Tr-3 付近で一旦くびれることから当該箇所に堀切等の城郭施設が残存するものと期待されたため設定した。表土層約30 cm を除去した時点で墓石と思われる40 cm 角ほどの礫が確認され、周囲から古銭約4 点と錆の進行した鉄片が出土した。古銭は3点がほぼ形状を留めており、うち2点からは『寛永通宝』の



▶ 図 47 出土遺物実測図

文字が読み取れる。鉄片は幅約7 mm、長さ4 cm ほどの細い板状のもので先端がL字に屈曲している。 錆が進行しており元の形状等は明らかでないが、釘等の類かと想像される。墓壙の輪郭も一部確認されたが、比較的新しい時期の所産と考えられたため一部を掘削したにとどめた。現在通路として利用している箇所の下で墓壙が確認されているため、丘陵が現在の形状にいたるまでにも墓地として利用されていたことが想定される。

Tr-4 Tr-3 と対応する東側のくびれ部に設定したトレンチである。表土層は 40 cm ほど堆積しているが、直下で基盤層が確認される。人為的な掘り込みは認められない。

▼まとめ

今回の調査では、現状で設定可能な箇所に4つのトレンチを設定して調査を行ったが、明確な城跡 関連遺構を確認することはできなかった。今回の工事予定地域は丘陵裾部に位置するため、堀切等の 施設は希薄であったものと思われる。

なお、周辺の踏査から頂上付近には地元で『山ノ神』と呼称される小さな祠が存在し、堀切はその50mほど頂上よりに存在することが判明した。調査時期が夏季であったため下草等の発育が著しく、山頂までは踏査できなかったが、地元での聞き取り調査では頂上部にさらに平坦部が存在し、冬季になれば堀切なども観察できるとのことであった。踏査や聞き取りの結果を鑑みると、城郭関連施設は当該調査地点よりもさらに高所に存在するものと想定される。

九樹城跡は九樹川とツルバ川によって外側と隔離された山城としては良好な場所に立地し、九樹の 集落にとって重要な役割を担った城であったものと考えられる。今回の調査範囲では明確な遺構を検 出しなかったが、当該丘陵が山城として機能していたことは間違いなく今後についても十分な注意が 必要である。

三里遺跡 (2002018)

所 在 地 三里字沖屋敷 他

調査期間 2002.11.15 ~ 2003.12.15

調査原因 ほ場整備事業

調査面積 480 ㎡ (960,000 ㎡)

代 縄文時代、中世

調查種別 試掘確認調查



▶ 図 48 調査地点位置図

▼ 調査の経過

本遺跡は、昭和51年に農地改良に伴って発見された

遺跡であり、南四国縄文後期を代表する遺跡のひとつとして知られる。当遺跡から出土する口縁部に 文様が集約される縁帯文土器主体の一群は、「三里式土器」と呼称され、宿毛貝塚(宿毛市)に代表さ れる宿毛式土器とそれに後続する松ノ木式との編年的及び型式的な位置付けが現在でも課題とされて いる。しかし、調査が実施された範囲は約70㎡と遺跡範囲のわずかに過ぎず、遺構の分布、遺跡の広 がり等の詳細は明らかになっていなかった。今回の調査範囲はこれまでの三里遺跡の範囲を包括する ものであるため、試掘確認調査によって遺跡の正確な範囲が特定できるものと期待された。

▼ 調査の経過

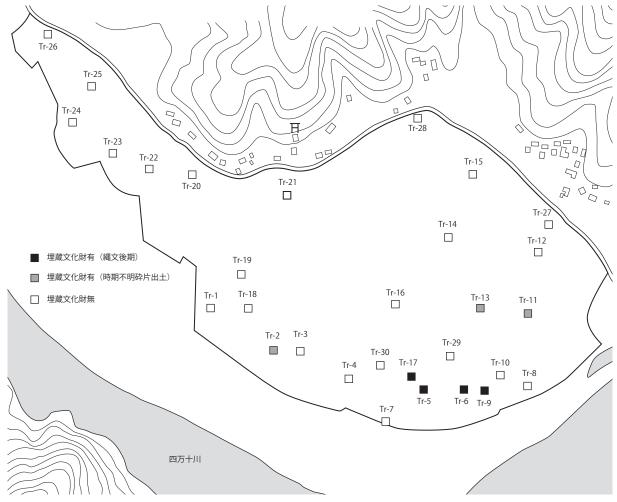
高知県は平成16年度以降に中山間地域開発事業の一環として中村市三里地区のほ場整備の実施を予 定していた。工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地三里遺跡を含むため、埋蔵文化財保護上の取り扱 いについて協議する必要が生じ、遺跡の有無及び内容・範囲等を把握する目的で当該工事に先立つ試 掘確認調査を実施するはこびとなった。

当該事業に関する調整は平成14年度よりおこなわれてきたが、現地にて試掘確認調査を開始した平 成15年度12月になって事業の中止が決定した。しかし、地区及び関係課との協議の結果、調査の成 果は今後の事業立案時の基礎資料としても活用できるとの判断から調査は継続しておこなうこととし、 12月半ばに当初予定されていた範囲についての調査を終了した。

▼ 調査の概要

調査対象地内に任意のトレンチを 30 箇所設定し、表土層を重機によって除去したのち、人力を併用 して遺構・遺物の発見に努めた。なお、遺構及び遺物の発見されたトレンチについては個別に実測等 を行い、出土状況及び遺構の検出状況等を記録に残した。

なお、調査中に来期も水田を利用することが確定したため、作付け時に耕作機等が調査トレンチ箇 所で埋没することのないよう、極力水田内にトレンチを設定しないように心がけた。このため調査ト



▶ 図 49 トレンチ配置図(1:5000)

レンチは作付けを行っていない旧水田及び荒廃地、竹林などに設定され、当初の予定よりもトレンチ数は減少した。加えて、試掘確認調査中に四万十川左岸の煙草畑では農薬散布が並行して行われており、 散布後に畑内には立ち入れないとのことから、煙草畑内には十分な調査トレンチを設定できていない。

各トレンチの調査結果を概観すると、自然堤防斜面裾部の煙草畑周辺と自然堤防頂上付近、県道南の概ね4つの区域に大別することができる。以下では基本層序について記載したのち、煩雑化を避けるため4つに大別した区域について説明し、必要に応じて各トレンチの調査内容を記述することとしたい。なお、この4大別に対応するトレンチ番号は以下のとおりである。

自然堤防斜面裾部 1、2、3、4、5、6、7、8、9

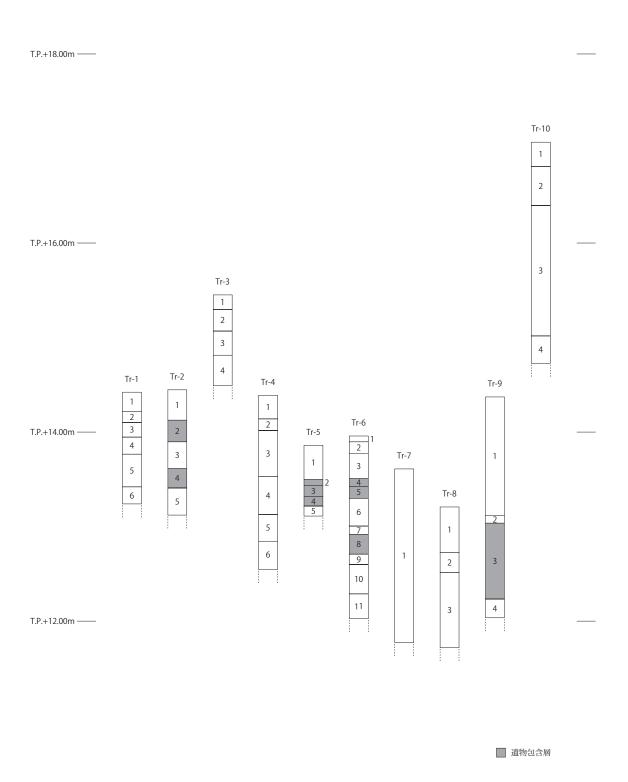
自然堤防頂上付近 10、11、13、14、16、17、18、19、29、30

県道南谷部 12、15、20、27、28

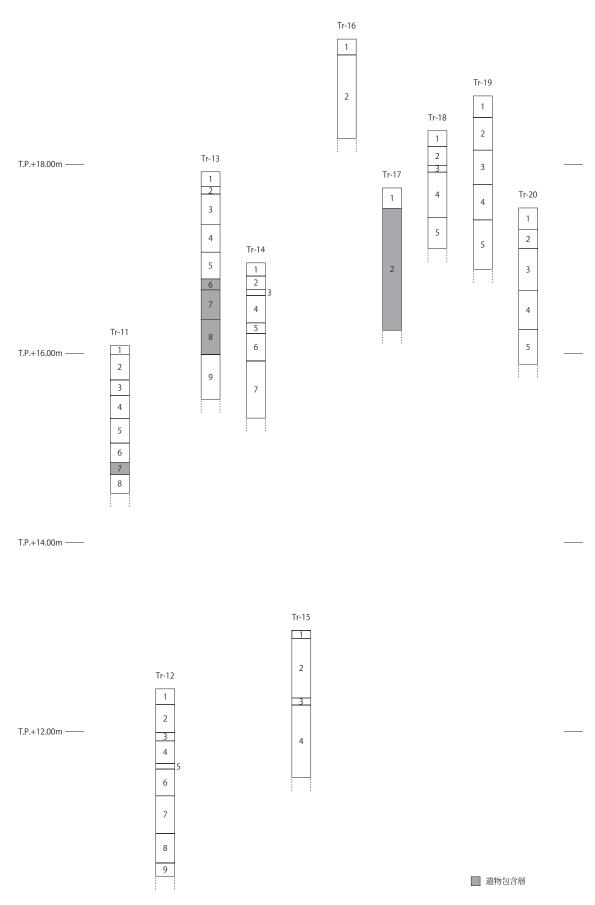
土塁以西微高地 21、22、23、24、25、26

※遺物出土トレンチについてはゴシックで記載。

基本層序 三里遺跡は四万十川左岸に立地し、河川の氾濫による影響を多大に受けてきた地域に所在する。そのため遺跡周囲で観察される層位の多くは粗粒砂~中粒砂等、粗い砂粒を多く含むものが多い。また、河川堆積による比較的均質な砂粒が堆積しているため堆積後の降雨もしくは水流等によって大



▶図50 柱状図1 (1:40)



▶図51 柱状図2 (1:40)

T.P.+18.00m	Tr-21	Tr-22 1 2 3 4 5 6	Tr-23		Tr-25	Tr-26 1 2 3 4 5			Tr-29	
T.P.+16.00m ——	3 4 5 6		2 3 4 5 6	Tr-24	4	7		Tr-28 1 2 3	Tr-30	_
T.P.+14.00m ——				6				5	3 4 5	_
T.P.+12.00m							Tr-27			_
T.P.+10.00m ——			▶ ⊠] 52 柱	状図 3	(1:40)	1 2 3 4 5			

▼ Tr-1

- 1. 耕作土
- 2. 灰褐色粗粒砂
- 3. 褐色粗粒砂
- 4. 灰色粘土~粗粒砂
- 5. 灰自色シルト〜粗粒砂
- 6. 褐色粗粒砂

▼ Tr-2

- 1. 耕作土
- 2. 灰白色シルト〜粗粒砂(粘質)
- 3. 褐灰色~灰白色粗粒砂~粘土
- 4. 青灰色粘土〜褐色粗粒砂荒い堆積 土器片含む(包含層)
- 5. 青灰色粘土 4層と類似する

▼ Tr-3

- 1. 暗褐色粗粒砂
- 2. 暗褐色粗~中粒砂
- 3. 暗褐色粗~細粒砂
- 4. 褐灰色粗粒砂

▼ Tr-4

- 1. 耕作土
- 2. 粗礫層
- 3. 明褐色粗粒砂 ラミナ状の堆積
- 4. 明褐色粗粒砂
- 5. 灰白色シルト〜粘土 粗粒砂少量含む
- 6. 暗褐色粗粒砂

▼ Tr-5

- 1. 耕作土砂
- 2. 褐灰色中粒砂〜細粒砂 炭化物含む
- 3. 褐暗色中粒砂 堅緻
- 4. 黄橙色細粒砂
- 5. 灰黄色粗粒砂~細粒砂

▼ Tr-6

- 1. 表土
- 2. 灰色中粒砂 均質な砂層 (洪水堆積)
- 3. 黄色~灰色極細粒砂
- 4. 褐色しまった粗粒砂
- 5. 浅褐色粗粒砂
- 6. 橙色極細粒砂 (〜細粒砂) ややしまった細粒砂
- 7. 明オリーブ灰色極細粒砂~シルト
- 8. 青灰色粗粒砂~シルト しまった堆積 炭化物多く含む
- 9. 青灰色粘土+極細粒砂 炭化物含む
- 10. 黄灰色粗粒砂
- 11. 褐色極細粒砂 硬くしまる

▼ Tr-7

1. 灰色粗粒砂 均質な砂層

▼ Tr-8

- 1. 灰色中粒砂 均質な砂層 (洪水堆積)
- 2. やや粘土混じる 粗粒砂
- 3. 粗粒砂 20mm 程の炭化物含む マンガン含む

▼ Tr-9

- 1. 灰色中粒砂 均質な砂層 (洪水堆積)
- 2. 明褐色細粒砂 硬くしまった堅緻な堆積
- 3. 明褐色極細粒砂~シルト (若干細粒砂)
- 4. 褐灰白色細粒砂~中粒砂粗い砂層

▼ Tr-10

- 1. 表土
- 2. 青灰色細粒砂と明褐色細粒砂の互層 砂層
- 3. 灰色中粒砂 均質な砂層 (洪水堆積)
- 4. 灰白オリーブ色シルト〜粘土 粗粒砂あり

▼ Tr-11

- 1. 耕作土
- 2. 床土
- 3. シルト〜細粒砂 砂質
- 4. 粗粒砂~シルト
- 5. 灰色粘土~粗粒砂
- 6. 灰色中粒砂 均質な砂層 (洪水堆積)
- 7. 灰色粘土 遺物微量あり(包含層)
- 8. 褐灰色シルト〜粗粒砂

▼ Tr-12

- 1. 耕作土
- 2. 褐灰色極細粒砂~シルト
- 3. 粗粒砂 葉理状の堆積
- 4. 灰色シルト〜粗粒砂
- 5. シルト~極細粒砂 マンガン斑含む
- 6. 灰色中粒砂 均質な砂層 (洪水堆積)
- 7. 灰褐色粘土~極細粒砂
- 8. 青灰色粘土
- 9. 青灰色粘土

▼ Tr-13

- 1. 耕作土
- 2. 堅緻な粗粒砂 鉄分の沈着あり
- 3. 灰色中粒砂 均質な砂層 (洪水堆積)
- 4. 黄灰色極細粒砂~中粒砂
- 5. 褐灰色極細粒砂~シルト
- 6. 褐灰色極細粒砂 5 層と類似
- 7. 黄灰色粗粒砂~粘土 (シルト含む)
- 8.7と類似するがやや粗粒砂多く堅緻
- 9. 青灰色粘土~粗粒砂

▼ Tr-14

- 1. 耕作土
- 2. 床土
- 3.2 と同じ
- 4. 褐色粗粒砂
- 5. 灰褐色極細粒砂~粗粒砂
- 6. 灰黄色シルト〜粘土
- 7.6 と同じ

▼ Tr-15

- 1. 耕作土
- 2. 褐灰色シルト
- 3. 青灰色粘土~極細粒砂
- 4. 灰色中粒砂 均質な砂層 (洪水堆積)

▼ Tr-16

- 1. 表土
- 2. 粗粒砂

▼ Tr-17

- 1. 表土
- 2. 黄褐色〜明褐色シルト 粘質で堅緻

▼ Tr-18

- 1. 表土
- 2. 灰色シルトに褐灰色極細粒砂 (旧耕土?) が混入
- 3. 褐色粗粒砂に灰色シルトが少量混入
- 4. 褐灰色粗粒砂 湧水著しい
- 5. 灰褐色粒砂 湧水著しい

▼ Tr-19

- 1. 耕作土
- 2. 黄灰色粗粒砂
- 3.2層と類似するがややシルトが少量混入少し、堅緻
- 4. 灰白色シルト〜粘土 やや粗い堆積
- 5. 黄灰色粗粒砂

▼ Tr-20

- 1. 耕作土
- 2. 床土~耕作土
- 3. ダケ土 (新客土)
- 4. 青灰色粗粒砂にシルト混入
- 5. 青灰色粘土に少量粗粒砂が混入

▼ Tr-21

- 1. 耕作土
- 2. 灰色中粒砂 均質な砂層 (洪水堆積)
- 3. 灰色シルト
- 4. 青灰色シルト〜粘土に粗粒砂が少量混入
- 5. 青灰色粗粒砂 均質な堆積
- 6. 青灰色粘土~シルト粘質

▼ Tr-22

- 1. 耕作土
- 2. 青灰色シルト (床土)
- 3. 明褐色堅緻な粗層 マンガン斑あり
- 4. 青灰色シルト
- 5. 黄灰色シルト
- 6. 青灰色シルトに黄灰色粘土混入
- 7. 青灰色シルト〜粘土

▼ Tr-23

- 1. 耕作土
- 2. 旧耕作土
- 3. 黄橙色シルト~極細粒砂 堅緻な堆積
- 4. 青灰色シルト~極細粒砂
- 5. 褐灰色極細粒砂~シルト 鉄分の沈着あり
- 6. 褐灰色〜黄灰色 細粒砂〜シルト 砂質
- 7. 灰色中粒砂 均質な砂層 (洪水堆積)

▼ Tr-24

- 1. 旧耕作土
- 2. 灰色シルト~極細粒砂
- 3. 灰色シルト
- 4. 灰褐色粗粒砂 極細粒砂
- 5. 褐灰色極細粒砂~粗粒砂
- 6. 灰色シルト〜粘土に粗粒砂が少量混入

▼ Tr-25

- 1. 旧耕作土
- 2. 青灰色シルト~極細粗粒砂黄斑含む
- 3. 青灰色粗粒砂~粘土 砂粒を含む粘質層
- 4. 褐灰色極細粒砂 青灰色粗粒砂少量混入

▼ Tr-26

- 1. 旧耕作土
- 2. 床土
- 3. 青灰色シルト〜粘土
- 4. 青灰色シルトに中粒砂混入
- 5. 灰色粗粒砂 軟弱な砂層
- 6. 青灰色シルト〜粘土
- 7. 青色粘土均質

▼ Tr-27

- 1. 旧耕作土
- 2. 床土
- 3. 褐灰色極細粒砂~シルト水分多い
- 4. 灰褐色シルト〜粘土 極細粒砂
- 5.4層と類似し極細粒砂が多く混入する
- 6. 黄褐灰色粘土 均質な粘土層

▼ Tr-28

- 1. 旧耕作土
- 2. 青灰色極細粒砂~シルト弱粘
- 3. 灰色極細粒砂〜粘土 やや粘質
- 4. 灰色粘土~極細粒砂 若干粗粒砂混入 互層に堆積
- 5. 青灰色粗粒砂+粘土 ラミナ状の堆積

▼ Tr-29

- 1. 灰色中粒砂 均質な砂層(洪水堆積)
- 2. 灰白色中粒砂 均質な砂層

▼ Tr-30

- 1. 表十
- 2. 明褐色シルト~極細粒砂 やや硬くしまる
- 3. 明褐色シルト~極細粒砂に粗粒砂少量混入
- 4. 明褐色粗粒砂
- 5. 明褐色極細粒砂

きく形状を変化させてしまうことも特徴として挙げられる。現在、四万十川左岸にみられる2本の自 然堤防も堆積する層位のほとんどが粗~中粒砂を多く含む砂質の堆積である。

三里遺跡周辺の現況は水田・畑及び荒廃地であり水田域に関しては昭和51年の調査時と比しても大きな変化は見受けられない。しかし、現在煙草畑として利用されている河川側は自然堤防が発達し大きな変化が看取される。調査範囲全体を概観すると河川に近い箇所では洪水による堆積が顕著に見られ、県道側では水分を多く含む粘質のシルト層が存在する。埋蔵文化財が残存するのは自然堤防の河川側斜面裾部で、表土直下の堅緻に締まる明褐色細粒砂層(地表下約0.5m)もしくはその下の青灰色シルト層(地表下約1.5m)である。両層とも広範囲に残存する様子はなく調査範囲の東南部のみで確認されている。

自然堤防斜面裾部

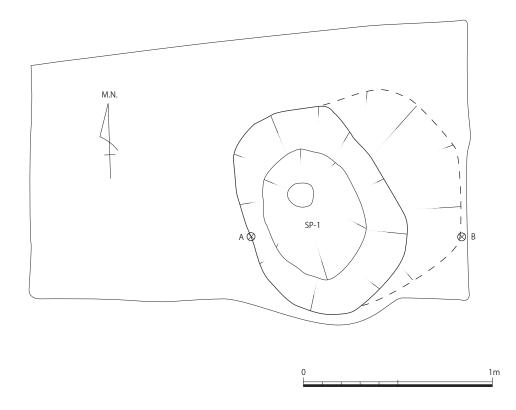
調査範囲で埋蔵文化財が確認されたのはこの地域のみである。具体的には、自然堤防のピークより南側の地域を指す。現状は斜面及び煙草畑であり、昭和51年の調査地点も当範囲に含まれている。

斜面の裾から四万十川にかけては一帯が煙草畑として利用されている。前述したように試掘調査実施中には煙草畑内は農薬散布中であり、ほとんど調査できない状況であったが、わずかながら調査できた Tr-1・4 では地表下約 2m まで厚く粗砂が堆積しており遺物包含層を確認することはできなかった。包含層が確認されるのは当地域内でも東側の自然堤防斜面裾部であり、遺物が出土するトレンチでは粗砂層以外にやや粘質もしくは堅緻に締まった極細粒砂層や青灰色粘質シルト層が見受けられ、遺物はこれらの堆積中に存在する。なお、四万十川よりの自然堤防付近 (Tr-7) では厚い粗砂が堆積し遺物包含層は見受けられない。

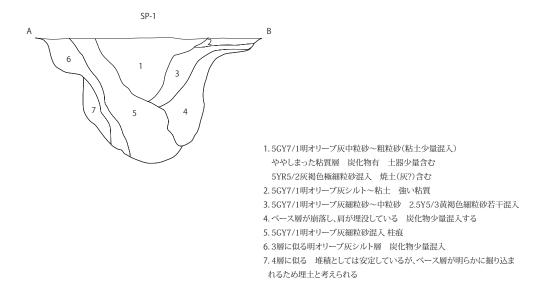
Tr-5 地表面から 40cm ほどで遺物包含層に到達する。ベースとなる堆積は堅緻にしまった灰黄色極細粒砂層(5層)で、2~4層には縄文時代後期の所産と考えられる土器片及び石器が含まれる。当トレンチではベース層上面で形状が円弧を描くプランが確認されており、炭粒等を多く含む灰褐色極細粒砂(~シルト)が堆積している。遺物もこの堆積部で多く出土しており、全体の形状は分からないものの土坑状の遺構と考えてよいのではないかと考えられる。埋土の堆積厚は 30cm ほどであり、土坑の南側は撹乱によって失われている。

Tr-6 地表面から 40cm ほどで中世期の包含層($4\sim5$ 層)が確認される。当包含層からは後述する 16 世紀後半から 17 世紀にかけての擂鉢や茶器等が少量出土する。地表より 1 m ほどで縄文時代の遺物包含層(8 層)に達する。基盤となる堆積は青灰色シルト(\sim 粘土)層(9 層)で、わずか 50m ほどしか離れていないにもかかわらず Tr-5 の状況とは大きく異なるが、出土する遺物には時期差が認められない。Tr-5、Tr-6 両トレンチの堆積状況は安定しており、後世に大きな変化が生じている様子も看取されないことから、包含層堆積時の地形に差があったものと考えられる。

なお、ベース層上面で柱穴1基が確認されている。SP-1は検出面での直径が約100cmをはかる比較的大きな柱穴で、深さは約70cmを測り柱痕も明確に残存する。柱穴埋土からは縄文時代の所産と考えられる浅鉢口唇部(100)が出土する。トレンチ内ではこの他に遺構を確認していないが、このような柱穴が単独で存在するとは考えにくいため周辺に関連する遺構が残存するものと考えられる。



T.P.+13.00m —



▶図55 遺構平面図(1:20)

また堆積の上方では自然堤防の堆積がきつい斜度を保って傾斜してきているのに対し、1.5m ほど掘削するとほぼ水平な堆積となる。これは両脇に設定した Tr-5、Tr-9 とは大きく異なる状況である。

このトレンチ内で検出した柱穴については北半を裁ち割って記録したのちサブトレンチごと埋め戻している。将来当地点を調査する機会があれば柱穴の南半については埋土が残存しており他の遺構との位置関係も明らかにできよう。

Tr-9 縄文期の遺物を確認したトレンチのうち最も西側に位置するトレンチである。表土(灰色粗粒砂層)を除去すると Tr-5 で見られた堅緻な明褐色極細粒砂層があらわれる。 Tr-5 では明褐色極細粒砂層 は基盤層であったが、 Tr-9 では明褐色極細粒砂層中で遺物が確認される。遺物の出土量はきわめて微量であるが現象としては包含層というべきである。 Tr-9 では明褐色極細粒砂層自体も斜度がきつく斜面はまだ南側に続く様相であり、上方には洪水層が堆積する。

自然堤防頂上付近

自然堤防頂上付近として分類した地域は、調査範囲を南北に縦断した最も高所にあたる自然堤防頂上付近とその北側斜面部分を指す。調査開始当初はこれまでの知見からこの範囲に良好な遺物及び遺構が残存するものと期待されていたが、顕著に堆積するのは厚い洪水層であり、明瞭な包含層を確認することはできなかった。なお、頂上付近は湧水が著しく、重機による掘削と同時に壁面が崩落し遺構検出が可能なトレンチは少ない状況であった。この範囲で遺物が確認されているのは Tr-11 及び Tr-13、Tr-17である。Tr-11と Tr-13の状況は比較的良く似た様相を呈しており、洪水によって運ばれたと考えられる均質な粗粒砂と粘質灰色シルト層との互層堆積が確認される。両トレンチから出土した遺物は細片でローリングを受けており、明らかにプライマリなものではない。また、胎土は乳白色から橙色を呈し、侠雑物の少ない水簸されたものであることから古墳時代以降、古代~中世にかけての所産ではないかと考えられる。わずかな遺物ではあるが、周辺もしくは上流域に該当する時期の遺跡が存在するという傍証となろう。

Tr-17 自然堤防頂上付近と分類した範囲のなかでやや様相を異にするのが Tr-17 である。 Tr-17 は遺物及び遺構の確認された Tr-5 の斜面上部に位置するトレンチである。上部に洪水砂は堆積しているが、その下には丘陵斜面裾部でみられた明褐色極細粒砂層が堆積している。裾部に比べてやや堅緻さに欠けるが、概ね同一の堆積と考えてよいと思われる。遺物の量は極めて少ないが明褐色極細粒砂層中で採取でき、胎土の様相から縄文時代の所産であろうと思われる。

なお、Tr-17よりやや下がった斜面の途中で平坦な面が形成される場所がある。この部分にもトレンチは設定したが (Tr-30)、他のトレンチよりは安定した堆積がみられるものの明褐色極細粒砂層は確認されず、遺物も採取できなかった。

県道南谷部

県道南谷部と呼称する範囲は、自然堤防のピークから谷状に落ち込んだ旧河川周辺である。いずれも、 青灰色シルト(~極細粒砂)もしくは灰色シルト層が主体となる粘質の堆積で、洪水堆積はほとんど見られない。上述したように水分を多く含み、グライ化の進行した堆積であり典型的な小河川周辺の様相といえる。現在も、小河川が存在したと思われる位置に小規模の溝が機能している。いずれのトレ ンチからも遺物は確認されておらず、遺跡の広がりは認められない。なお、Tr-20 は、周囲に溜め池状の窪みが以前存在したらしく、きわめて軟弱な粘質層が堆積している。層位もやや荒れており溜め池以前の旧地形を窺い知ることは難しい。

土塁以西微高地

ここで土塁と呼称するものは Tr-20と Tr-22 の間に存在する高さ約 $2 \sim 3m$ 、延長 150m の施設である。 地元での聞き取り調査では四万十川の氾濫に備えた堤防であるとの説明を受けた。この土塁の形成時期についての資料は存在しないようであり、詳細は不明である。

この土塁以西の水田及び畑地は Tr-20 など県道南谷部の水田に比べ高所にある。そのため上方には やや土壌化した褐灰極細粒砂及びシルトが確認される。この堆積を過ぎると状況は県道南谷部と同様 であり、グライ化した軟弱な青灰色シルト層が互層に堆積する。遺物及び遺構は存在せず、包含層と おぼしき堆積も見当たらない。

なお、前述した理由で作付けを行っている水田・畑地内にはトレンチを設定していないため、水分が多く軟弱な場所にトレンチを設定していることは否めない。概ね状況に大差はないものと思われるが今後開発が計画される際には注意が必要であろう。

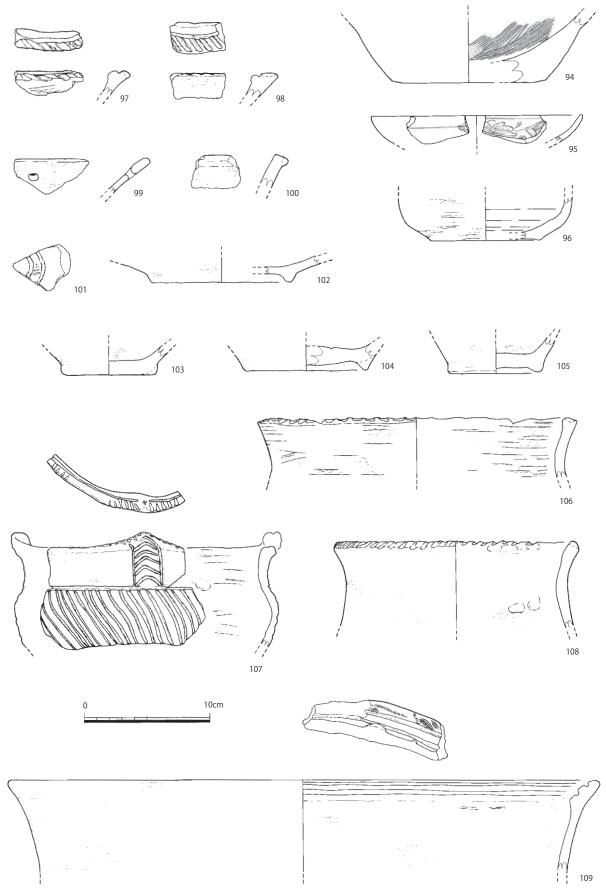
出土した遺物 遺物に関しては、縄文時代後期に属するものが最も多く確認された。以下では出土した遺物について記載する。

中世段階の遺物としては擂鉢 (94)、皿 (95)、建水 (96) が出土している。94 は備前産擂鉢底部である。備前 V 期に分類できるものと考えられる。95 は肥前産の染付皿口縁部である。内面に意匠が配されている。96 は建水である。内外面を回転ナデ調整で仕上げ、底部から屈曲して直立気味に立ち上がる。94 \sim 96 はいずれも Tr-6 o 4 \sim 5 層中で確認された遺物である。

縄文時代の遺物は Tr-5、Tr-6 を中心に出土しており、そのうち図化できたものは、深鉢 6 点、浅鉢 3 点、底部 3 点である。

97・98 は深鉢口縁部である。97 は口縁部に縄文と刻み目が施されている。98 は口縁がやや外反し、端部に刻み目を持つ。条痕施文後にナデ調整で仕上げられており、胎土に金雲母が混入する。101 は深鉢胴部破片である。並行して円弧を描く2条の沈線がみられる。胎土に角閃石を含む。106・108 は粗製深鉢である。口縁端部に刻み目を施文し、内外面は貝殻状痕が観察される。107 は深鉢である。波頂部に円形刺突文と沈線がみられ、波頂部下に山形の沈線を施文する。端部には斜行沈線が認められる。松ノ木式に顕著な端部の肥厚はおこなわない。胴部に多条沈線をもち、内面は貝殻状痕が観察される。109 は粗製の深鉢である。口縁部内面を肥厚させ2条の沈線をめぐらせる。口縁端部に縄文が施文され、内面は条痕文で調整する。

99 は無文の浅鉢である。口縁部内面をやや肥厚させる。内面はナデ調整で仕上げ、外面は条痕をナデで消す。内外面両側から穿孔する補修孔がみられる。100 は浅鉢口縁端部である。口唇を外側へわずかに肥厚させ、端部は平坦におさめる。内外面をナデ調整で仕上げる。Tr-6 の SP-1 から出土する。102 は浅鉢底部である。高台状の底部をもつ。103 は平底の底部で、外面がやや白みを帯びる。104・105 は高台状の底部である。



▶図56 出土遺物実測図1

縄文後期の土器群は出土する層位や位置から昭和51年調査時に岡本・木村両氏によって『三里式』と定義されている縁帯文土器群と同じ時期の遺物と考えられる。しかし、三里式の指標のひとつである口縁部に渦巻文・円文を施文した明瞭な破片は出土しておらず、宿毛式や後続する松ノ木式の範疇に属すると思われる細片が多く見受けられる。型式設定時にすでに岡本・木村両氏が「ローカルカラー的なものか、時期差によるものは将来の検討にまつとして(以下略)」(『三里遺跡』中村市教育委員会1978)と述べているように『三里式』と呼ばれる型式が地域差をあらわすものか時期差の指標とされるべきものか、新資料を加えてさらに検討される必要があろう。

土器のほかに石器も多数出土している。これらは数度の二次的な打撃によって刃部を形成するスクレイパー的な機能が想定されるもの、もしくは楔形石器に分類されるものが多い。また、自然礫の長軸両端を小さく剥離した石錘や石核等も数点出土する。石材は113を除くすべてが頁岩である。

110 は楔形石器と考えられる。上下の辺縁から複数回の打撃が加えられ剥片半ばを超す剥離が重複して存在する。片側は欠損する。111・114・115・117・118・119・120 は 2 次加工のある剥片である。111 は主要剥離面に後出する剥離が辺縁に不規則に並ぶ。背面には一部原礫面が残存する。114 は主要剥離面形成時の打点が残る。背面側から連続する微細な調整が辺縁に施されている。115 は腹面側に連続する剥離が見られる。背面には原礫面が残存する。主要剥離面の打点は残存しない。117 は主要剥離面右側の辺縁に不規則な剥離が連続する。背面側の右側縁には原礫面が残存している。118 は円礫に長軸方向に加撃して得た剥片の左側縁に背面側からの微細な剥離が並んでいる。ほかに主要剥離面に後出する剥離が下部に数箇所認められる。背面側は円礫面のまま残り、主要剥離面形成時の打点およびバルブは残存している。119 も 118 と同様円礫を長軸に添って加撃し、得た剥片の左辺に微細な剥離が連続する。当該剥片も打点及びバルブが顕著に観察できる。左側縁にはフィッシャーが顕著である。120 は主要剥離面左即縁に不揃いな剥離が連続する。背面は原礫面が残る。112 は側縁から多数の剥離がおこなわれる石核である。腹面中央部には主要剥離面と思われる剥離面が残存するが、大きさや形状等から石核と考えるべきであろう。113 は石錘である。砂岩の長軸両端を数回打撃して成形している。116 は剥片である。打点近くに潜在的な割れが生じていたためか、打点周辺はやや変則的な割れを生じている。背面には原礫面が残る。

いずれの石器についても原礫面を残すなど作りは比較的粗雑であり、円礫を二分しその側縁に刃部を形成しようと意図するものが多い印象を受ける。刃部には小さく浅い剥離もしくは不揃いな剥離が連続し、背面からだけでなく腹面側からの二次的な剥離が観察される。当該遺跡における石器生産は、定型的な剥離をあまりおこなわず目的に応じて素材剥片に簡単な加工を加えて用いていたものと思われる。

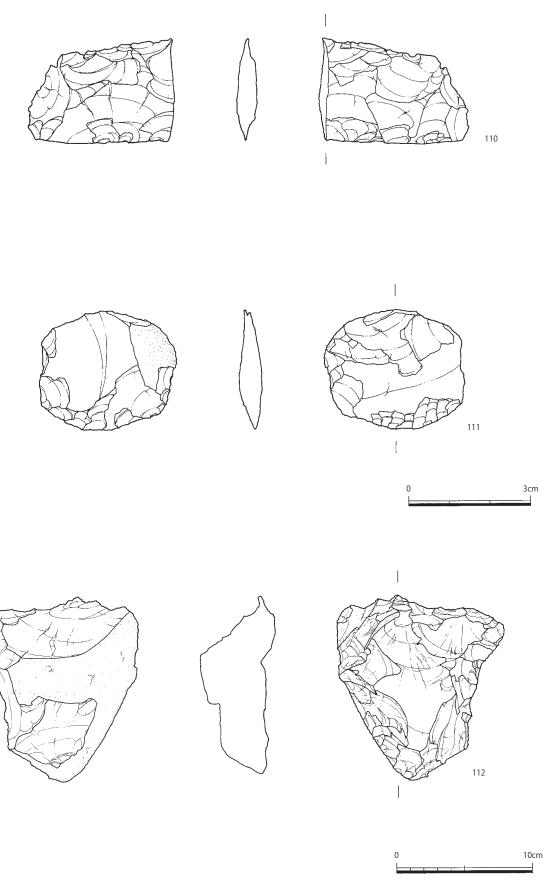
▼まとめ

今回の調査では、四万十川によって形成された自然堤防斜面の裾部より縄文時代後期の遺物及び遺構を確認した。既往の調査では焼土を含む炉跡と考えられるもの以外に明確な遺構を確認していなかったため、当調査で柱穴及び土坑が確認されたことは三里遺跡の集落の規模を考えるうえで大きな成果であった。

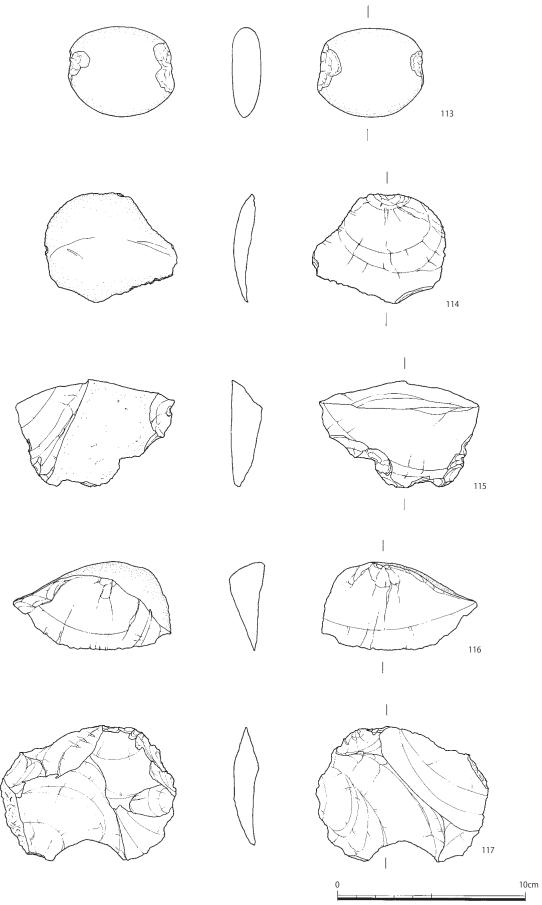
昭和 53 年に刊行された調査報告には注目すべきいくつかの事項が記載されている。一つは、縄文期の包含層が場所によっては $3.5 \sim 4$ m 地下に存在しているのではないかとの指摘である。昭和 51 年の調査においては指摘する $3.5 \sim 4$ m まで掘削は行っておらず、今次調査においても最も深く掘削したトレンチでも、使用した重機の制限から、地表より 2m ~ 2.5 m 程にとどまる。Tr-6 の状況から自然堤防裾部の包含層は現在の丘陵斜面の傾斜よりも緩やかに起伏するものと考えられるので、そのまま遺物包含層が自然堤防下部にも残存すると仮定した場合、現在の自然堤防頂上付近からは $4 \sim 5$ m ほど下位にあることになろう。したがって今回の調査で明らかにできたのは自然堤防裾部の地表面から 2m 程度の深度までの状況であり、自然堤防下に残存する埋蔵文化財の有無については今後周辺の地形を大きく改変するような大規模な開発計画が発生した際の課題としたい。

もう一つは周辺の小字名を取上げて中世段階の屋敷跡等の存在を示唆するものである。今回は広域に試掘を実施したため、調査範囲に対するトレンチの密度は決して高いものではない。それを勘案しても中世期の明確な包含層をほとんど確認できていない。たしかにホノギの名称を見るかぎり中世段階の集落が展開していたことは想像に難くないが、今回の調査結果を見るかぎりそれらが地表下2mまでに存在するとは言い難い状況である。自然堤防斜面裾部のTr-6において少量ながら16世紀後半~17世紀頃の所産と考えられる遺物片を採取したが、周辺への広がりは確認できなかった。しかし、擂鉢のような生活雑器や建水といった茶器の存在は、ホノギが示すとおり周辺に屋敷地が存在したことを示唆する資料と考えることができよう。

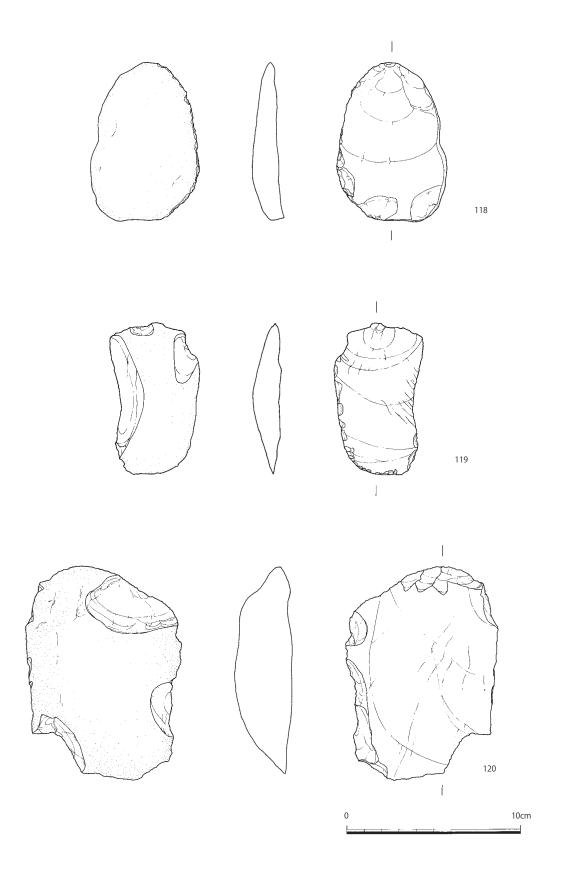
中世段階の遺構・遺物等に関しては、洪水等により消失もしくは埋没したものか、あるいは残存する箇所が限定されるものか今後とも注意が必要である。



▶図57 出土遺物実測図2



▶図58 出土遺物実測図3



▶図59 出土遺物実測図4

具同中山遺跡群 (2003018)

所 在 地 具同字八反田 3189 番地 他

調査期間 2004.8.31 ~ 2004.9.2

調査原因 民間開発

調査面積 25 ㎡ (18,838 ㎡)

代 弥生時代、古墳時代 時

調查種別 試掘確認調查



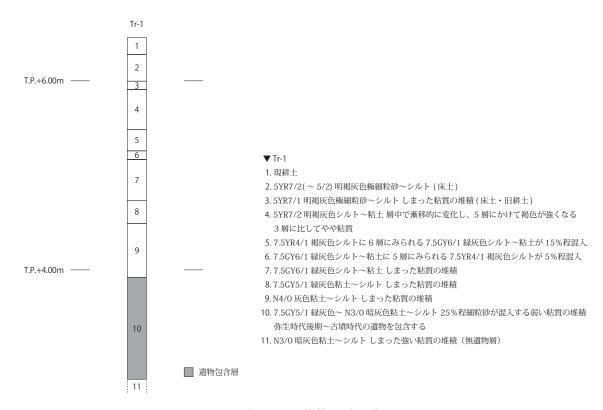
▶ 図 60 調査地点位置図

▼ 調査の経過

平成16年度に具同地域において総合ショッピングセンター新設事業が計画された。店舗の新設に 先立って造成工事がおこなわれることとなり、埋蔵文化財包蔵地における遺跡等の取り扱いについて、 事業主と協議をおこなった。造成工事は現状の水田面より 2m ほど盛土を行う計画で、これによると 店舗建設時においても基礎が盛土内でおさまることから埋蔵文化財についての影響は少ないものと考 えられる。しかし盛土及び施設の重量によって隣接地の地盤が沈降しないために部分的に矢板を設置 することとなったため矢板設置面積分に対して試掘確認調査を実施するはこびとなった。

当該地点は県道敷設時に遺構が確認されている地点よりも北に位置し、これまで遺跡の残存状態が 明らかになっていない場所であることから、今回の調査で具同中山遺跡群内での遺構遺物の広がりの 一端が確認できるものと期待された。





▶ 図 62 柱状図 (1:40)

▼ 調査の概要

調査対象地内に任意のトレンチを1箇所設定し、表土層を重機によって除去したのち、人力を併用 して遺構・遺物の発見に努めた。

基本土層 当該工事が計画されるまでは現地は水田として利用されており上部 60 cm ほどは耕作土と 床土が堆積する。耕作層から下約 $70\sim80$ cm は褐灰色のシルト (\sim 極細粒砂)層が堆積し、それ以下 はグライ化の進行したシルト (\sim 粘土)層に変わる。遺物は地表面より 2.5m ほど下のグライ層から出土する。今回の調査では地表面より 3.6m 掘削して調査を終了したが、遺物は 3.4m 付近まで存在して いる。

Tr-1 調査対象地域の中で矢板設置部分に近く、構造物に影響の少ない駐車場部分に一箇所トレンチを 設定して調査を行った。

Tr-1では地表下より 2.5m~ 3.5m 付近までのグライ層で古墳時代の所産と考えられる遺物が確認された。しかし、下層に至る前に壁面が崩落を始め、遺物量の豊富になる 3m 付近ではすでに 3 方の壁が崩落もしくはひび割れなどを生じるなどトレンチ内で作業をすることが危険な状況となった。このためトレンチ内で人力掘削を行うことを断念し、掘削幅を減少させて重機で掘削した土から遺物を採集することとした。トレンチ上から掘削の状況を観察する限り周囲のグライ層と明らかに異なる色調の範囲が確認できることから遺構が存在する可能性が高いものと考えられる。上述のようにトレンチ内で検出作業等をすることはできなかったが、隣接地点の遺構の分布状況とよく似た印象であった。

Tr-1 では狭小な範囲を掘り下げたにもかかわらず遺物量・遺構量ともに充実した分布を示していることから当該地点付近は遺跡の広がりの中では辺縁といった箇所ではなく、中心的な位置にあるものと考えられる。

▼まとめ

今回の調査では、広域な敷地内に1箇所のみトレンチを設定するにとどまったため開発範囲内における遺物・遺構の分布状況を正確に把握できたわけではない。しかし、Tr-1に見られる状況は明確に遺跡が北部にも広がっていることを示している。当該地点の西側に位置する駅から県道にいたる市道部分等の周辺で確認されている遺物・遺構ともよく似た状況であることからも同一の集落が広がっているものと考えられる。Tr-1以北及び以東の状況は今後の調査結果に委ねることとしても県道以北については埋蔵文化財が良好に残存している可能性が高い地域として認識しておく必要がある。

当該工事によって埋蔵文化財が影響を受けることは計画上ないものと考えられるが、今後近隣を開発する計画がある場合には十分な注意が必要である。

遺物観察表

▼ 国見南沖屋敷遺跡

図番号	号 図版 出土地点		器種	法量	(cm)		色 調		特徴
囚钳与	番号	層位	66 作里	口径	器高	内 面	外 面	断 面	村 取
1	9	Tr-6	染付椀	(10.9)	(2.0)	5Y7/2 灰白	7.5Y7/1 灰白	2.5Y8/3 淡黄	
2	9	Tr-8	青磁	_	_	5GY6/1 オリー ブ灰	2.5GY6/1 オ リーブ灰	N7/0 灰白	
3	9	Tr-6	土錘	1.3	(3.92)	10YR8/4 浅黄 橙	5YR7/4 にぶい 橙	10YR8/4 浅黄 橙	

▼ 具同中山遺跡群:97-5GN

四亚口	図版	出土地点	器種	法量	(cm)		色 調		此。如
図番号	番号	層位	 	口径	器高	内 面	外 面	断 面	特徴
4	15	Tr-3	高坏	(19.0)	(5.1)	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	波状文。
5	15	Tr-2	酿	9.0	11.0	N7/0 灰白	N6/0 灰	N7/0 灰白	頸部・胴部に波状文。
6	15	Tr-3	壺	_	(6.9)	10YR7/3 にぶ い黄橙	7.5YR7/4 にぶ い橙	10YR7/3 にぶ い黄橙	内外面ナデ。
8	15	Tr-2	甕	21.8	43.8	N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	須恵器。外面に叩き。内面 に同心円文。

図番号	図版	出土地点	器種		法量(mm/g)	特徵		
囚钳与	番号	層位	66 作里	最大長	最大幅	厚さ	重 量	□ 1/1	村 1数
7	15	Tr-2 包含層	砥石	250	74	57	1900	砂岩	敲打痕有

▼ 具同中山遺跡群

図番号	図版	出土地点	器種	法量	(cm)		色 調		N-E	徴
凶笛写	番号	層 位	谷性	口径	器高	内 面	外 面	断 面	147	15以
9	22	Tr-1	甕	13.0	9.1	10YR6/3 にぶ い黄橙	5YR7/6 橙	10YR6/2 灰黄 褐	外面にナデ。	

▼ 具同中山遺跡群:2002013

図采り	図番号 図版 出土地点		器種	法量	(cm)		色 調		特 徴
囚钳与	番号	層位	66 作生	口径	器高	内 面	外 面	断 面	村 14
10	31	Tr-4 14~16層	甕	(25.0)	(1.4)	N7/0 灰白	N4/0 灰	N7/0 灰白	口縁部。内外面ハケ。
11	31	Tr-4 14~16層	高坏	_	(6.3)	7.5YR6/3 にぶ い褐	5YR7/6 橙	7.5YR5/3 にぶ い褐	脚部。内外面ナデ。

▼ 具同中山遺跡群:2002014

図番号	図版	出土地点	器種	法量			色 調		特徵
1.2	番号	層 位 Tr-3 SP-3	₹ħ. / -} mt	口径	器高	内 面	外 面	断 面 5V8/1 医白	
12	41	11-3 5P-3	染付皿	13.0	3.4	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白 10GY8/1 明緑	5Y8/1 灰自	肥前産。17世紀後半。
13	41	Tr-2 4~5層	染付皿	_	_	10Y8/1 灰白	灰	5Y8/1 灰自	
14	41	Tr-1	椀	(14.8)	(3.5)	7.5YR7/4 にぶ い橙	10YR8/2 灰白	7.5YR7/3 にぶ い橙	
15	41	Tr-2 4層	青磁椀	(11.2)	(4.2)	5GY7/1 明オ リーブ灰	5GY7/1 明オ リーブ灰	7.5Y8/1 灰白	
16	41	Tr-1	椀	(11.8)	(3.5)	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	10YR7/3 にぶ い黄橙	
17	41	Tr-4 3~4~5層	捏鉢	_	(3.5)	N6/0 灰	N5/0 灰	N6/0 灰	東播系須恵器。
18	41	Tr-4 3~4~5層	捏鉢	_	(2.55)	N6/0 灰	N6/0 灰	N6/0 灰	内外面ナデ。東播系須恵器。
19	41	Tr-5 焼土 4~7層	Ш	_	1.45	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰自	2.5Y7/1 灰白	内外面ナデ。
20	41	Tr-5 焼土 4~7層	Ш	_	1.1	10YR7/3 にぶ い黄橙	10YR7/3 にぶ い黄橙	10YR7/1 灰白	底部に沈線。
21	41	Tr-3 8~9層	坏	_	(3.7)	7.5YR8/3 浅黄 橙	7.5YR8/4 浅黄 橙	7.5YR8/2 灰白	底部。内外面ナデ。ヘラキリ。
22	41	Tr-3 8~9層	坏	_	(2.2)	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	底部。外面にナデ。輪高台。
23	41	Tr-3 8層	土師皿	_	(1.05)	10YR8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白	底部。内外面ナデ。10世 紀前半。
24	41	Tr-3 8層	土師皿	_	(1.6)	10YR8/3 浅黄 橙	10YR8/4 浅黄 橙	10YR8/4 浅黄 橙	底部。内外面ナデ。10世 紀前半。
25	41	Tr-5 SX-1	Ш	8.8	1.9	5YR8/2 灰白	5YR7/2 明褐灰	5YR8/2 灰白	内外面ナデ。タール付着。 灯明皿。
26	42	Tr-3 8層	羽釜	(24.4)	(5.8)	7.5YR5/4 にぶ い褐	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/4 にぶ い褐	外面にナデ・指頭圧痕。内面に強いハケメ。
27	42	Tr-3 8層	羽釜	(22.6)	(7.4)	7.5YR6/4 にぶ い橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶ い橙	外面にナデ。内面に強いハ ケメ。
28	42	Tr-3 8層	竈	21.6	8.6	7.5RY5/2 灰褐	7.5RY5/2 灰褐	7.5YR5/1 褐灰	内面に強いナデ。
29	42	Tr-4 7層	底部	_	(2.7)	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰自	
30	42	Tr-4 5~6層	Ш	_	(1.4)	10YR8/3 浅黄 橙	7.5YR8/3 浅黄 橙	10YR8/3 浅黄 橙	
31	42	Tr-5 SX-1	坏	14.6	3.7	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	内外面ナデ。
32	42	Tr-5 SX-1 4層	瓦器椀	14.5	5.3	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	外面に板状工具によるナデ。
33	42	Tr-4 7~9層	椀	13.2	5.7	7.5YR7/6 橙	5YR7/3 にぶい 橙	7.5YR6/4 にぶ い橙	内外面ナデ。
34	42	Tr-4 8~9層	椀	13.5	4.9	10YR8/4 浅黄 橙	10YR6/3 にぶ い黄橙	10YR4/1 褐灰	内外面ナデ。内面に板状工 具によるナデ。
35	42	Tr-4 7~9層	椀	15.0	6.4	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	5YR7/3 にぶい 橙	内外面ナデ。内面に板状工 具によるナデ。
36	42	Tr-4 8~9層	椀	(12.6)	(5.9)	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	2.5Y7/1 灰白	表面ナデ。
37	42	Tr-4 7~9層	椀	13.8	6.8	10YR5/2 灰黄 褐	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	外面にナデ。内面に指頭圧 痕・板状工具によるナデ。
38	42	Tr-4 7~9層	甑	19.8	11.2	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶ い黄橙	内外面ナデ。内面に板状工 具によるナデ。
39	42	Tr-2 10層	台付鉢	_	(4.7)	5YR7/6 橙	5YR7/4 にぶい 橙	5YR7/4 にぶい 橙	外面に指頭圧痕。
40	42	Tr-4 7~9層	高坏	_	(7.7)	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	10Y4/1 灰	脚部。内外面ナデ。
41	42	Tr-4 7~9層	高坏	(10.4)	(6.6)	7.5YR6/4 にぶ い橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/2 灰褐	脚部。内外面ナデ。内面に 絞り痕。外面に工具による ナデ。
42	42	Tr-4 7~8層	高坏	16.9	13.7	5YR7/4 にぶい 橙	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	内外面ナデ。外面脚部に指 頭圧痕。

	図版	出土地点		法量	(cm)		色 調		
図番号	番号	層位	器種	口径	器高	内 面	外面	断 面	特 徴
43	43	Tr-3 8層	長胴甕	(27.2)	(10.4)	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	頸部外面に指頭圧痕。口縁 内側にヨコハケ。金雲母。。 ヨコナデ。
44	43	Tr-4 7~9層	甕	(16.2)	(9.6)	5YR7/3 にぶい 橙	5YR7/4 にぶい 橙	5YR4/1 褐灰	外面に指頭圧痕。内外面ナ デ・剥落。
45	43	Tr-4 8~9層	甕	23.0	7.0	7.5YR7/2 明褐 灰	7.5YR7/4 にぶ い橙	7.5YR7/3 にぶ い橙	内外面ナデ。内面に粘土帯 継ぎ目・指頭圧痕。
46	43	Tr-4 7~8層	甕	(20.0)	(11.7)	7.5YR7/4 にぶ い橙	7.5YR6/8 橙	7.5YR5/1 褐灰	内外面ナデ。内面に粘土帯 継ぎ目・指頭圧痕。
47	43	Tr-3 11層	甕	(22.8)	(18.5)	7.5YR8/4 浅黄 橙	7.5YR7/2 明褐 灰	7.5YR6/1 褐灰	内外面に粘土帯継ぎ目・ナ デ・指頭圧痕。外面胴部に 工具痕。
48	43	Tr-3 11 層	手づくね	(6.9)	6.15	2.5Y6/2 灰黄	7.5YR7/4 にぶ い橙	7.5YR7/4 にぶ い橙	内外面ナデ。内面底部に指 頭圧痕。
49	43	Tr-4 7層	底部	_	(3.6)	10YR8/4 浅黄 橙	10YR8/3 浅黄 橙	10YR8/4 浅黄 橙	
50	43	Tr-4 7~9層	小型壺	_	(6.2)	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶ い橙	内外面ナデ。内面底部に指 頭圧痕。
51	43	Tr-4 8~9層	壺	(9.8)	(7.9)	7.5YR8/4 浅黄 橙	7.5YR7/4 にぶ い黄橙	7.5YR7/4 にぶ い黄橙	内面頸部に指頭圧痕。
52	43	Tr-2 11 層	壺	(13.0)	(4.2)	7.5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	内外面ナデ。
53	43	Tr-4 8~9層	甕	(13.8)	(3.35)	5YR7/4 にぶい 橙	2.5YR7/3 淡赤 橙	2.5YR7/3 淡赤 橙	口縁部。剥落著しい。
54	43	Tr-4 7~9層	甕	(12.4)	(8.8)	2.5Y6/1 黄灰	7.5YR7/6 橙	2.5Y6/1 黄灰	内外面ナデ。
55	44	Tr-3 8層	土錘	1.65	(4.1)	7.5YR8/4 浅黄 橙	7.5YR8/4 浅黄 橙	5YR7/6 橙	
56	44	Tr-4	土錘	1.38	4.77	2.5YR6/4 にぶ い橙	10YR6/4 にぶ い赤橙	_	
57	44	Tr-4	土錘	1.35	4.15	7.5YR8/4 浅黄 橙	7.5YR8/4 浅黄 橙	7.5YR8/4 浅黄 橙	
58	44	Tr-4	土錘	1.4	(3.3)	5YR7/3 にぶい 橙	2.5YR6/6 橙	7.5YR8/3 浅黄 橙	
59	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.46	4.13	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄 橙	
60	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.2	3.87	5Y7/1 灰白	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	
61	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.37	4.2	2.5YR7/8 橙	2.5YR6/8 橙	2.5YR7/8 橙	
62	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.28	39.2	10YR7/3 にぶ い黄橙	10YR8/3 浅黄 橙	10YR7/3 にぶ い黄橙	
63	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.4	2.25	7.5YR8/4 浅黄 橙	10YR8/4 浅黄 橙	7.5YR8/6 浅黄 橙	
64	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.4	4.75	7.5YR7/6 橙	10R6/6 赤橙	7.5YR8/4 浅黄 橙	
65	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.45	3.8	2.5YR7/6 橙	2.5YR6/4 にぶ い橙	7.5YR8/4 浅黄 橙	
66	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.24	3.8	10YR8/3 浅黄 橙	10YR8/3 浅黄 橙	10YR7/2 にぶ い黄橙	
67	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.32	5.05	7.5YR7/4 にぶ い橙	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	
68	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.35	3.38	7.5YR7/4 にぶ い橙	7.5YR7/4 にぶ い橙	10YR8/4 浅黄 橙	
69	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.25	3.54	5YR7/6 橙	2.5YR7/8 橙	N4/0 灰	
70	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.3	3.4	7.5YR7/6 橙	2.5YR6/6 橙	7.5YR8/6 浅黄 橙	
71	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.42	2.76	2.5YR6/4 にぶ い橙	2.5YR6/4 にぶ い橙	2.5YR7/6 橙	
72	44	Tr-4 3~4層	土錘	1.28	1.3	10YR8/4 浅黄 橙	2.5YR6/6 橙	10YR7/1 灰白	
73	44	Tr-4 3~4~5層	土錘	1.3	4.31	7.5YR8/4 浅黄 橙	7.5YR8/4 浅黄 橙	7.5YR8/4 浅黄 橙	
74	44	Tr-4 3~4~5層	土錘	1.44	2.92	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	

図番号	図版	出土地点	器種	法量	(cm)		色 調		特徵
凶番写	番号	層 位	希 悝	口径	器高	内 面	外 面	断 面	村 钗
75	44	Tr-4 SK-1	土錘	1.2	2.7	10YR8/3 浅黄 橙	2.5YR6/6 橙	N5/0 灰	
76	44	Tr-4 SK-1	土錘	1.3	3.06	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
77	44	Tr-4 5~6層	土錘	1.29	4.27	10R6/3 にぶい 赤橙	10R6/3 にぶい 赤橙	10R5/1 赤灰	
78	44	Tr-4 7層	土錘	1.87	5.64	10YR8/2 灰白	10YR7/3 にぶ い黄橙	10YR8/2 灰白	
79	44	Tr-4 7層	土錘	1.4	5.5	7.5YR8/6 浅黄 橙	10R5/3 赤褐	10R6/6 赤褐	
80	44	Tr-4 7層	土錘	1.5	4.4	5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	
81	44	Tr-4 7層	土錘	1.35	4.63	7.5YR8/6 浅黄 橙	2.5YR7/6 橙	7.5YR8/6 浅黄 橙	
82	44	Tr-4 7層	土錘	1.1	4.36	10YR7/3 にぶ い黄橙	10YR7/4 にぶ い黄橙	10YR7/3 にぶ い黄橙	
83	44	Tr-5 4~6層	土錘	2.0	4.6	10YR7/2 にぶ い黄橙	10YR7/3 にぶ い黄橙	10YR7/2 にぶ い黄橙	
84	44	Tr-5 4~6層	土錘	1.03	3.96	2.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	
85	44	Tr-5 焼土 4~7層	土錘	1.35	4.18	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	
86	44	Tr-5 焼土 4~7層	土錘	0.92	2.98	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/2 灰黄	10Y4/1 灰	
87	44	Tr-5 焼土 4~7層	土錘	0.97	2.43	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	
88	44	Tr-5 焼土 4~7層	土錘	1.32	2.44	10YR7/3 にぶ い黄橙	10YR7/3 にぶ い黄橙	2.5Y8/3 淡黄	
89	44	Tr-5 焼土 4~7層	土錘	0.98	2.12	10YR7/2 にぶ い黄橙	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶ い黄橙	

図番号	★ 図版 出土地点 契				法量(mm/g)		石 材	特徵
凶笛写	番号	層位	器 種	最大長	最大幅	厚さ	重 量	1 1/1	付 100
90	44	Tr-3 8~9層	叩石	98	66.5	29	300	砂岩	敲打痕有
91	44	Tr-2 SP-2 3層	石うす	145	286.5	114	8300	砂岩	

▼ 九樹城跡:2002015

図番号	図版	出土地点	器種		法量(mm/g)		石 材	特徴
凶笛写	番号	層位	 宿性	最大長	最大幅	厚さ	重 量	白 材	付 版
92	47	Tr-3	寛永通宝	25	_	1	2.2		
93	47	Tr-3	寛永通宝	24.5	l	1	1.8		

▼ 三里遺跡:2002018

115

116

117

118

119

120

58

58

59

59

59

Tr-5 2 · 3層

Tr-5 2・3層

Tr-5 2・3層

Tr-6 8層

Tr-6 8層

Tr-5 2・3層

二次加工のある剝片

剝片

二次加工のある剝片

二次加工のある剝片

二次加工のある剝片

二次加工のある剝片

56

46

70

90

86

118

83

80

90

61

48

86

16

18

15

18

1.5

35

71.7

57.9

98.3

118.7

73.6

400

頁岩

頁岩

頁岩

頁岩

頁岩

頁岩

四亚口	図版	出土地点	叩錘	法量	(cm)			1	色 調			杜	21	U+		
図番号	番号	層位	器種	口径	器高	内	面		外 面	断面		特	~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~	X 		
94	56	Tr-6 4~5層	すり鉢	_	(5.2)	2.5Y	R6/6 橙	2	.5YR6/6 橙	2.5YR6/6	橙	備前V期。				
95	56	Tr-6 4~5層	Ш	(16.6)	(2.2)	5GY8	8/1 灰白	5	GY8/1 灰白	2.5Y8/3 淡	黄	肥前産。				
96	56	Tr-6 4~5層	建水	_	(3.4)	10R4	1/3 赤褐	1	0R5/3 赤褐	10YR6/3 に い黄橙	こぶ	内外面ハケ。	16	世紀	後半	۴.
97	56	Tr-5 2・3層	深鉢	_	(2.3)	1	4/2 灰黄 褐	7.5	5YR4/2 灰褐	10YR4/1 神	易灰	口縁縄文と	刻み目	1.		
98	56	Tr-5 2・3 層	深鉢	_	(1.9)		6/3 にぶ 黄橙	į	5YR6/6 橙	10YR5/2 / 褐	黄	刻み目。口 ナデ。金雲 ナデ。				
99	56	Tr-5 2・3層	無文浅鉢	_	(2.8)		5/3 にぶ 黄褐	10)YR5/3 にぶ い黄褐	10YR6/3 に い黄橙	こぶ	内面ナデ。 厚。補修孔 ナデ消し。				
100	56	Tr-6 SP-1	浅鉢	_	(2.6)	7.5Y	R4/3 褐	7.5	5YR5/4 にぶ い褐	7.5YR5/4 に い褐	こぶ	口唇部をわる。内外面:		二肥丹	夏さ!	せ
101	56	Tr-5 2・3層	深鉢	_	_	7.5Y	R6/6 橙	7	.5YR6/8 橙	7.5YR6/6	橙	胴部破片。 角閃石。	すり	消し	縄戈	艾 。
102	56	Tr-6 8層	浅鉢	_	(2.0)	7.5Y	R2/1 黒	7.5	5YR3/2 黒褐	7.5YR3/2 #	具褐	高台状底部。	,内夕	「面が	トデ。	0
103	56	Tr-5 2・3層	底部	_	(2.3)	2.5YR	4/8 赤褐	5Y	R7/4 にぶい 橙	5YR4/1 褐	灰	底部。内外面	面ナテ	0		
104	56	Tr-5 2・3層	底部	_	(2.15)	7.5Y	R6/6 橙	7.5	5YR4/1 褐灰	7.5YR3/2 点	具褐	高台状底部。	,内夕	「面け	トデ。	0
105	56	Tr-6 8層	底部	_	(2.6)	2.5Y3	8/1 黒褐	2.	5Y3/1 黒褐	2.5Y7/1 灰	白	高台状底部。 痕有り。	。裏庭	まにす	旨頭	圧
106	56	Tr-5 2・3層	粗製深鉢	(24.8)	(4.8)	5YR4	1/6 赤褐	5Y	R4/4 にぶい 赤褐	10YR4/1 褐	易灰	口縁刻み目。痕。	。内夕	和	貝殻	条
107	56	Tr-5 2・3層	深鉢	(21.0)	(9.0)	7.5YR	3/1 黒褐	7	.5YR4/3 褐	10YR7/2 に い黄橙	こぶ	内面に貝殻の	条痕。			
108	56	Tr-5 2・3層	粗製深鉢	(18.0)	(6.3)		4/2 灰黄 褐	10)YR5/4 にぶ い黄褐	10YR6/2 / 褐	黄	刻み目。条 母混入。内				雲
109	56	Tr-5 2・3層	粗製深鉢	(46.8)	(7.3)	1	6/4 にぶ ハ橙	10)YR6/4 にぶ い橙	10YR5/3 は い黄褐	こぶ	口縁部。内面 口縁端部に約				
	न्यस्व	出土地点					社. 县	⇒ (.	mm/g)							\equiv
図番号	図版 番号	田工地点 層 位	2	景種	揖	表大長	最大幅		厚さ	重 量		石 材	特	Ê	徴	
110	57	Tr-5 2・3層	楔形	形石器		25	35		7	6.9		頁岩				
111	57	Tr-6 8層	二次加工	のある剝	片	29	32		8	7.9		頁岩				
112	57	Tr-5 2・3層	二次加工	のある剝	片	132	121		46.5	750		頁岩				
113	58	Tr-6 SP-1	1	5錘		47	54		15	64.1		砂岩				
114	58	表採	二次加工	のある剝	片	57.5	68		8	32.8		頁岩				



スゲンダ駄場遺跡(2001001) Tr-3 検出状況



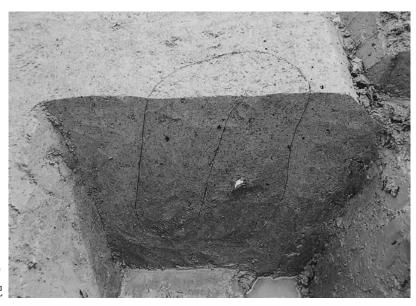
スゲンダの駄場遺跡(2001001) Tr-3 北壁土層堆積状況



具同中山遺跡群(2002013) 遺物出土状況



具同中山遺跡群(2002014) Tr-1 焼土検出状況



具同中山遺跡群(2002014) Tr-2 SP-3 半裁状況



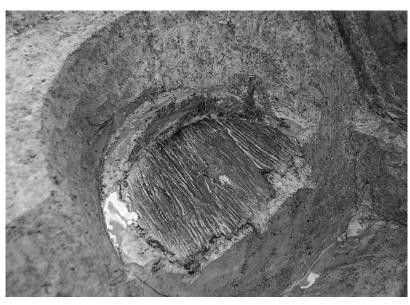
具同中山遺跡群(2002014) Tr-2 SP-2 完掘状況



具同中山遺跡群(2002014) Tr-3 SP-3 遺物(12)出土状況



具同中山遺跡群(2002014) Tr-3 SP-6 半裁状況



具同中山遺跡群(2002014) Tr-3 SP-6 桶出土状況



具同中山遺跡群(2002014) Tr-4 SP-14 SP-15 土層堆積状況



具同中山遺跡群(2002014) Tr-4 北壁土層堆積状況



具同中山遺跡群(2002014) Tr-4 8~9層遺物出土状況



具同中山遺跡群(2002014) Tr-5 SX-1 遺物(32)出土状況



具同中山遺跡群(2002014) Tr-5 焼土検出状況



九樹城跡(2002015) 遺跡の遠景



九樹城跡(2002015) Tr-2 完掘状況



三里遺跡(2002018) 調査区の遠景



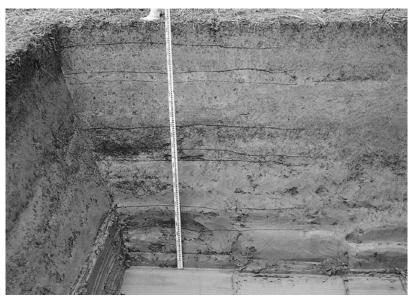
三里遺跡(2002018) Tr-6 遺物出土状況



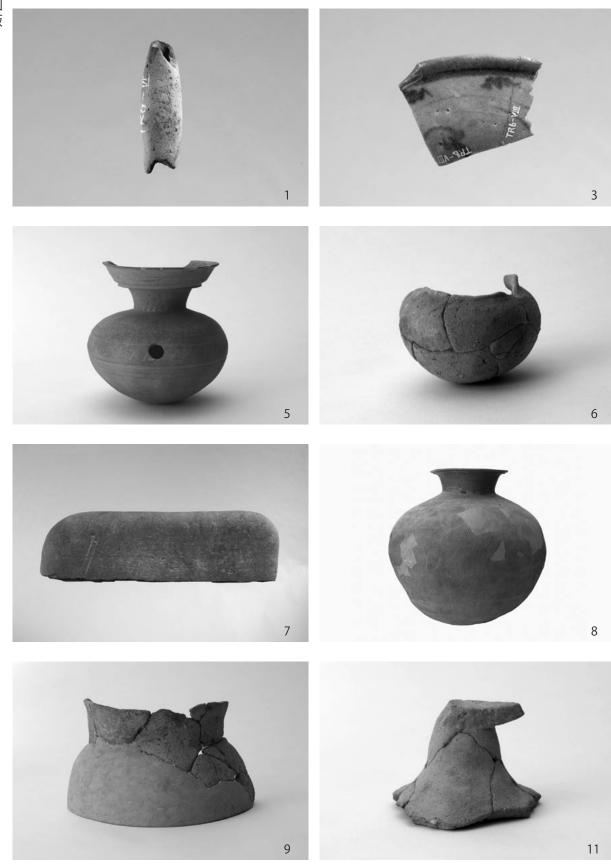
三里遺跡(2002018) Tr-6 柱穴半裁状況

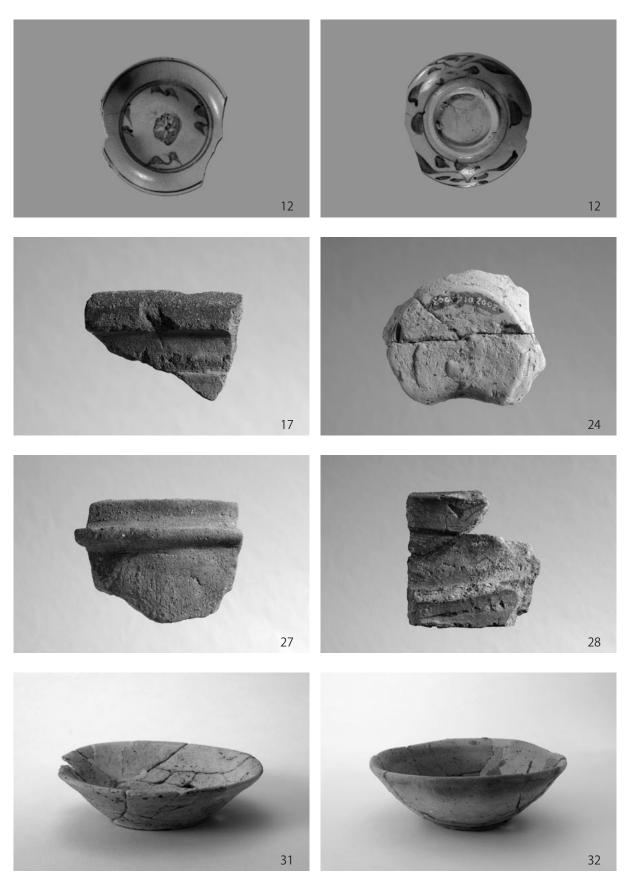


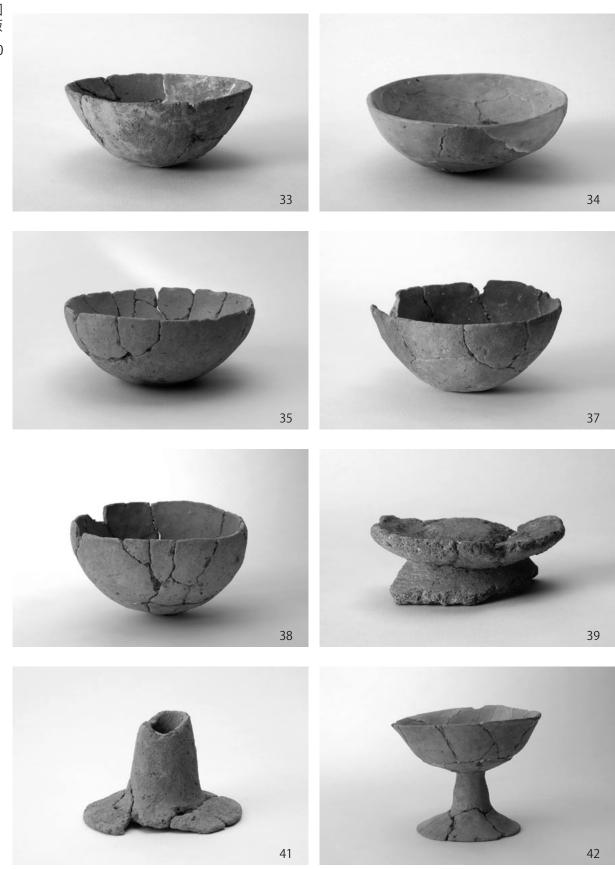
三里遺跡(2002018) Tr-9 土層堆積状況

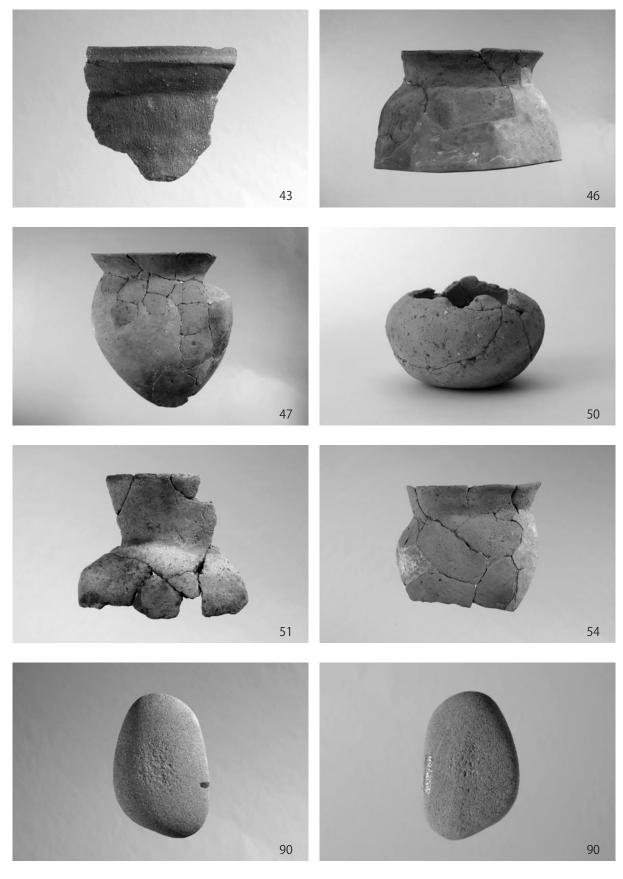


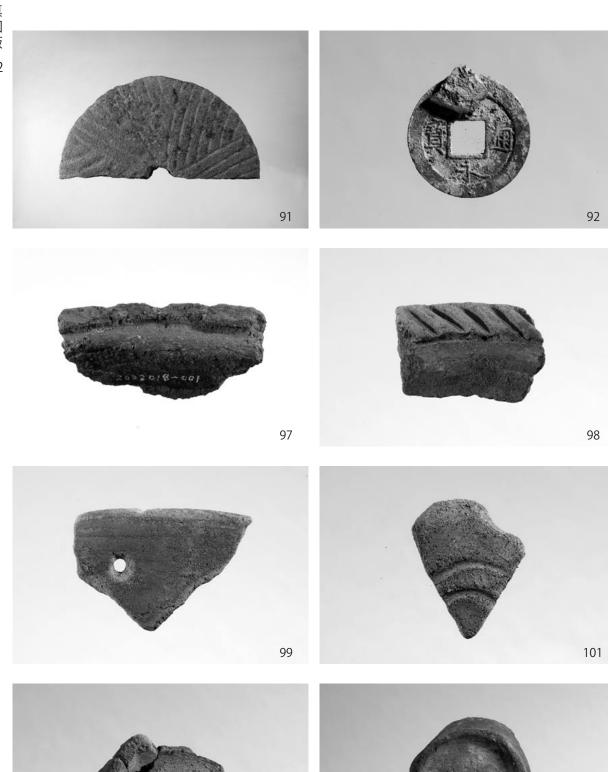
具同中山遺跡群(2003018) Tr-1 土層堆積状況





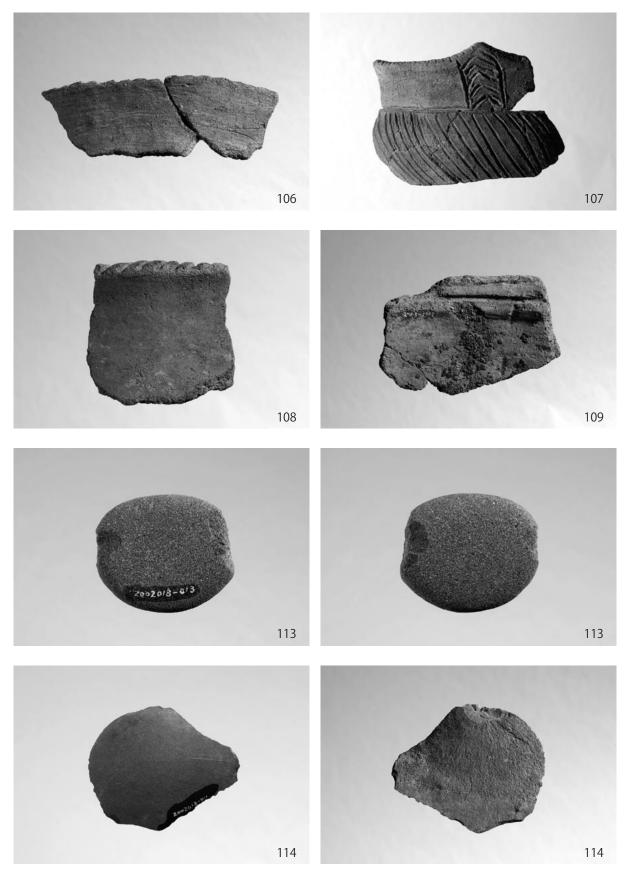


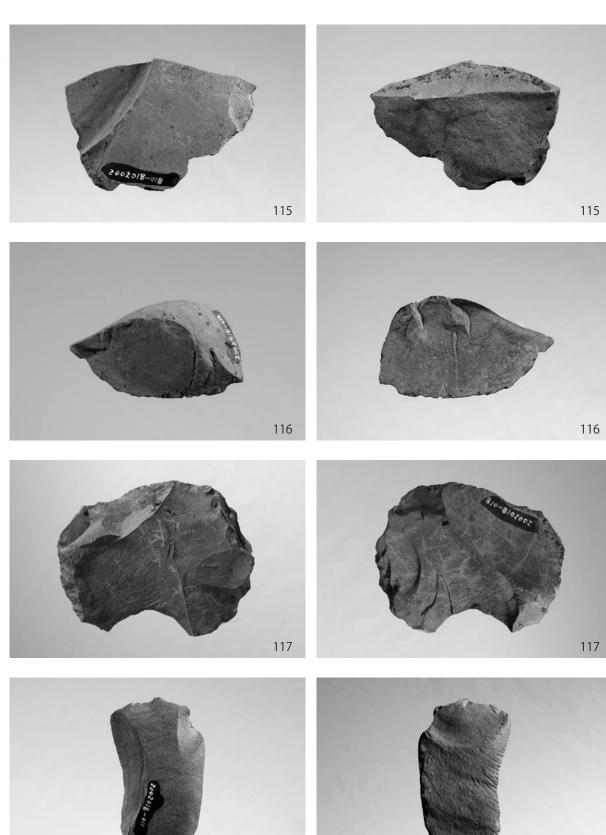












報告書抄録

ふりがな	しまんとしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく							
書名	四万十市埋蔵文化財発掘調査報告							
副書名	平成 2 年度~平成 16 年度 市内遺跡試掘確認調查報告書							
巻 次								
シリーズ名	四万十市文化財調查報告							
シリーズ番号	第3輯							
編著者名	川村慎也							
編集機関	四万十市教育委員会							
所 在 地	〒 787-0012 高知県四万十市右山五月町 8-22 TEL 0880(34)7311(生涯学習課)							
発行年月日	西曆 2008 年 3 月 10 日							
"所 収" 遺"跡 名	新 ° 在 " 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くにみみなみおきゃしきいせき 国見南沖屋敷遺跡	四万十市国見字南沖屋敷		070170	32° 58′ 53″	132° 52′ 31″	901211~901225	252 m [‡]	鉄道敷設
くどうなかやまいままぐん 具同中山遺跡群	" 具同字南カギダ 3215-2 他		070052	32° 58′ 44″	132° 54′ 55″	971101~971114	60 m	市道敷設
大量敷遺跡	″大屋敷字クワノキダ 他		490048	33° 7′ 35″	132° 59′ 50″	980212~980226	75 m ²	ほ場整備
くどうなかやまいせきぐん 具同中山遺跡群	"具同字八反田 3189 番地 他	-	070052	32° 58′ 38″	132° 54′ 53″	010123~010209	256 m²	民間開発
スゲンダの駄場遺跡	〃大用字スゲンダ、谷田	39207	070127	33° 6′ 8″	132° 57′ 30″	010508~010511	32 m ²	市道敷設
くどうなかやまいせきぐん 具同中山遺跡群	〃具同字カヌキ 3269-1 他		070052	32° 58′ 36″	132° 54′ 52″	030217 ~ 030304	165 m ²	民間開発
くどうなかやまいせきぐん 具同中山遺跡群	″ 具同字北ミソデン 2915- 他		070052	32° 58′ 40″	132° 54′ 55″	030304~030320	80 m ²	民間開発
九齿齿城跡	〃九樹字古城山 1370 番地他		070083	32° 57′ 13″	132° 49′ 52″	030610~030704	15 mੈ	墓地造成
三重量遊	〃三里字沖屋敷 他		070097	33° 0′ 40″	132° 51′ 38″	031115~031215	480 m²	ほ場整備
具同中山遺跡群	〃具同字八反田 3189 番地他		070052	32° 58′ 59″	132° 57′ 27″	040831 ~ 040902	25 m ²	店舗新設
所収遺跡名	種別	とな時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国見南沖屋敷遺跡	集落。	1近世	柱 穴溝		青磁・近世陶磁・土錘			
具同中山遺跡群	集落	万墳 時代 5 生 時 代	柱 穴		土師器・須恵器 弥生土器		古墳時代の遺物 古代~中世段階の集落址	
大 屋 敷 遺 跡	集落。	3 近世	柱 穴		青 磁			
スゲンダの駄場遺跡	散布地	L 文時代	文時代 な		縄文土器(?)			
九 樹 城 跡	城 跡 г	3 近 世	土	坑	古	銭		
三 里 遺 跡	生 莈	■文時代 □近世	柱	穴	穴 縄 文 土器 縄文時代後期の遺物 縄文時代後期の柱穴			

四万十市文化財調査報告 第3輯

四万十市埋蔵文化財発掘調査報告

平成 20 年 (2008年) 3 月 10 日発行

発 行 四万十市教育委員会

〒 787-0012 高知県四万十市右山五月町 8-22 TEL 0880 (34) 7311

編 集 生涯学習課 社会教育振興係

印刷 川北印刷株式会社